

# シヨコラ

ジェラール・ノワリエル・著  
館葉月・訳

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

第1章 ハバナ生まれの若い奴隷の物語をいかにして発見したか 15

歴史から忽然と消えてしまった男 15

両親も名字もないハバナ生まれの奴隷 18

キューバでのラファエルの足跡 20 / 当時のキューバとはどんな街だったか 25

黒人蔑視に満ちた、あるフランス人ジャーナリストの記録 27

キューバでは、奴隷の所有者は白人貴族だけにとどまらなかった 31

困窮にあえぐ人間に一片の同情も感じない白人ブルジョワの印象記 33

敬虔な宗教意識に基いて結びつく、サン・イシドロの住民 35

ラファエルのからだに刷り込まれたキューバ独自のリズム 38

当時のフランス社会に蔓延していた、黒人奴隷への偏見 40

第2章 ショコラはビルバオで漂白されそこねた 44

白人の主人との旅立ちの日 44 / カスターニョというラファエルの主人の出自 49

カスターニョ家の子孫からの手紙 51

野生動物か怪物のように扱われた、バスクでのラファエル 54

からだを馬用ブラシでこすられたラファエルは、カスターニョ家から逃げ出した 58

鉱山で働きながら、ラファエルは人生で初めて「自由」を味わった 61

ビルバオで出会い、新しい主人となったトニー・グライスという人物 65

第3章 ラファエルはいかにして「ショコラ」になったか 70

ラファエル、主人に連れられて名門サーカス座、ヌーヴォー・シルクを訪れる 70

ヌーヴォー・シルクの帝王、オレールの素性 75

つかの間のパリ散策で目にしたもの 82 / 黒人偏見の長い歴史 86

貴族たちの見事なパフォーマンスで人気を誇ったモリエ・サーカス 89

パリ社交界、そして貴族が好むサーカスの主役は馬だった 91

ヌーヴォー・シルクの舞台監督、レオポル・ロワイヤルという人物 93

## 第4章 手ひどく殴られて 98

カスカドゥールとしてのデビュー舞台 98

シヨコラ、ついに「芸人」としての一步を踏み出す 106

ラファエル、闘牛士ピカドールの役を見事にこなす 112

## 第5章 歴史家はなぜ主人公が悪魔との契約書にサインしたと考えたか 117

シヨコラ、ついに主役を演じ、スターの仲間入りを果たす 117

シヨコラを一躍有名にした人物 121 / アグストによる地獄の特訓が始まる 129

アメリカの奴隷によって作られたミンストレルというスペクタクル 134

## 第6章 シヨコラはうまく切り抜けた 140

ラファエル、主人のトニー・グライスと決別す 140

アグストの傑作「シヨコラの結婚」が完成するまで 145

衣装と宣伝用ポスターの綿密な戦略 148

## 第7章 世界の人気者 161

- ヌーヴォー・シルクの総帥オレール、突然、一座を去る 161  
シヨコラ、失脚から見事な復活へ 166 / パリ万国博覧会、始まる 171  
フランス人の、植民地世界に対するふたつの視線 174  
ラファエル、世界から愛される人気者に 181

## 第8章 カラモコ・ドウアツタラ 185

- パリのサーカス、変貌の予兆 185 / 新しい文化の中心地、モンマルトル 187  
ヌーヴォー・シルクの新しい支配人、ラウル・ドンヴァル 192  
ヌーヴォー・シルクの新作『巴里をギャロップ』の大ヒット 195  
ラファエル、『シヨコラの28日間』で演技の幅を一気に広げる 200

## 第9章 ラファエルはよく響く大笑いでどのよう批判をはね返したか 204

- フランス人社会に溶け込もうとするラファエル 204  
ヌイイの街の縁日での出来事 209 / 休暇の旅行先での思い出深い出会い 212  
フテイトとラファエルの不安 215  
フテイト、サラ・ベルナールの『クレオパトラ』のパロディで名声を高める 218  
若い観客や特権階級の子供をターゲットにした、ドンヴァルの新戦略 221

第10章 なぜラファエルは不名誉な役を受け入れたのか 226

ラファエルとモンマルトルとのつながり 226

ドンヴァールと挿絵画家たちとの「人種」論争 230

ラファエル、初の女性役を演じる 238

対カンガルーとのボクシング・マッチ 242

第11章 ロートレックとラファエルの交流 246

フテイト、ロシア人ダンサーと駆け落ちする 246

パリじゅうが夢に見た、ふたりの人気クラウンの組み合わせ 250

ラファエル、『オセロ』で初めて演劇の役を演じる 255

画家ロートレックにとってのフテイトとシヨコラ 258

生きるために侮辱を受け入れるしかない者は、自尊心を捨てて侮辱を相対化するしかない 263

第12章 マリーと愛の物語について 269

ラファエル、警察署に「仮滞在許可書」を取りに行く 269

ふたりの意識を変えたムーラン・ルージュの舞踏会 274 / シヨコラの恋 282

第13章 赤いジレを着て 289

フテイトとシヨコラへの、芸術エリートたちの突然の熱狂 289

フテイトの徹底した完璧主義 296

フテイトの心に残っていた、ラファエルに対する優越感とプライド 303

ハイチ人ジャーナリストの「人種差別」への告発 306

第14章 ふたりは映画の発明以前に大スクリーンのスターになった 310

ある画期的な出会いと出来事 310

スクリーンに映し出されたシヨコラとフティットの『ヴィルヘルム・テル』 317

フティットの本当の姿 319

次第に互いの心の奥を知り、ふたりの絆は固くなっていった 322

パリ・サーカス界の衰退が始まる 330

第15章 サロン曲芸師 333

ある高校生の鋭い主張 333

精神分析医が読み解いたフティットとシヨコラの寸劇の意味 338

新支配人イポリット・ウツクが行ったヌーヴォー・シルクの「アメリカ的転回」 342

貴族からの招待の堪えがたい夜会 347

どんな世界、どんな場所でも演じることが出来る唯一のアーティスト 351

第16章 アポポイト・ミアマ！ 353

ラファエル、マリー、そして子供たちの日々 353

アポポイト・ミアマ 356 / 家族を「芸能一家」にするという夢 360

権力を持つ者は、権力に苦しむ者に茶化される 362

シヨコラへのステレオタイプのイメージを再生する広告ポスターの数々 368

第17章 カルティエ・ラタンにて 373

二度目のパリ万国博覧会 373

フテイトとシヨコラ、別々の場所で同時に演技する！ 377

ラファエルの「同胞たち」 383 / ふたりのハイチ人同胞 387

第18章 フテイトとシヨコラは女性役を演じて栄光を手に入れる 393

隠れた傑作『シヨコラの死』 393 / シヨコラとフテイト、絶頂期を迎える 397

フランス社会の、シヨコラへのまなざしの変化 402

女性役をも完璧に演じたふたりは、ついに本物の役者と認められる 407

第19章 「陽気なニグロ」 415

パリとフランス全土に巻き起こったケーキ・ウォークの熱狂の嵐 415

フランスの芸術家、ジャーナリストらも絶賛 421

ケーキ・ウォークをめぐる論争 426

フテイトとシヨコラ、花形スターの座を奪われる 429

第20章 ラファエルは、もうバンブーラを踊れないことをいかにして悟ったか 437

ふたりは突然一座を解雇され、フテイト、精神を病む 437

シヨコラとマリーと子供たち 440

フテイトがラファエルに下した最終判決 442

ラファエルの追放を後押しした陰かげのふたり 445

第21章 パリジャンが憐れみの目を向けたときにシヨコラに起こったこと 451

精神を病んだラフェエルにパリ市民は寄付を贈った 451

ひとりのクラウンが成功すれば、別のクラウンが退場する 456

ふたりの男のバーでの会話 460

ふたりの子供にまで押された謂れもない烙印らくいん 463

第22章 笑いの負債 469

『ル・ファイガロ』が行った、シヨコラへの寄付の本当の意味 469

「サーカスの時代」から「映画の時代」へ 477

シヨコラとフティット、ヌーヴォー・シルクで再びデュオを組む 486

第23章 ラファエル、病気の子供たちを笑わせて勲章を授かる 489

「わたしはいきているのです。シヨコラを演じています」 489

シヨコラの笑顔が多くの子供たちを救った 494

共に生き、共に行動する 499

シヨコラとフティットの再起 503

第24章 モイーズ 514

シヨコラ、喜劇役者としてデビューする 514

## 第25章

ラファエル、旧知の俳優ファイルマン・ジェミエの門を叩く 518  
サーカスのコメデイと劇場の喜劇のあいだにある大きな溝 520  
悲惨なりハーサル 523  
メデイアから無視された「俳優ラファエル」と劇『モイーズ』 528  
沈黙の掟を破ったラファエルはいかに罰せられたか 535

娘シュザンヌの死 535

その後のラファエルとフテイト 544

パリ市民たちからの止まらない寄付と、フテイトとの再会 548

戦争のさなかで 550

シヨコラ、ボルドーに死す 554

## エピソード

名前、記憶、時の経過に伴う摩耗についての考察 558

ラファエルの死後 558

ラファエルとマリーが遺したもの 564

私は「シヨコラの寡婦」 569

※本文には、今日こんにちの人権意識に照らせば不適切と思われる、黒人に対する呼称や表現が用いられておりますが、本書のテーマおよび時代性を理解するうえで必要不可欠であると判断し、あえてそのままといたしました。なにとぞご理解いただけますようお願い申し上げます。

※本文には、カッコで括くった〔注〕が2種類出てきますが、以下、次のように分けて使用しております。

（ ） ……原著者自身による〔注〕。あるいは、

訳者および編集部による、前の単語の別の言い方や表現

「 」 ……訳者および編集部による、前の単語の補足説明

ハバナ生まれのある奴隷の物語をいかにして発見したか

### 歴史から忽然と消えてしまった男

「海の向こう」——この魔法の言葉は、幼かった私に、光にあふれた白とブルーの世界を想わせた。私はといえば、アルザスの小さな村の灰色に染まった対極の世界で生きていたのだった。大人になって、しばしば現実はそのような憧れの世界とは大きくかけ離れているのだと学んだ。それでも、このキューバへの旅は、私が長らく待ち望んだものだった。シンポジウムや講演会のために大西洋を渡ることはよくあったが、今回の目的はそうではない。私はここハバナに、ある調査を最終的に完成させるために来たのだ。

波面から1万メートル上空の飛行機のなかで、ラファエルの足跡を追い求めてたどった道筋を、私は思い返していた。当初は、この人物にさほどの注意を払っていなかった。2009年の初めのことだ。アーティストの友人たちと共に、若い聴衆が差別をめぐる問題に関心を持てるような演劇の小品を作ろうとしていた。レイシズムを告発するよく聞く道徳的な台詞の羅列は避けたかった。そうした言葉はもはや大して役に立たないだろう。いまでは誰もが、レイシストとは自分のことではないと信じているのだから。自分自身に直接関係していると聴衆が感じられるような、何か新しいアイディア



フランス人作家フラン＝ノアンが書いた  
子供向けの挿絵つき本  
『フティットとショコラの回想録』(1907年出版)

が必要だった。

「理想的なのは、笑いを通してこの問題を扱うことだ。君が何について笑うかで、君が誰かが分かるだろう」。この提案に全員が一致した。友人たちは、劇の主人公になるような歴史上の人物を見つけてほしいと私に言った。そのとき、カナダ人言語学者による1889年のフランスに関する記念碑的な著作のなかで、ある脚注を読んだことを私は思い出した。

「パリの人々が大好きな黒ん坊（モリコ）はショコラだ。ヌーヴォー・シルク座の道化師だ！」

ショコラの名前に言及した歴史家は他にもいるが、どれも当時の黒人に対する偏見を浮かび上がらせるための文脈においてだ。ステレオタイプの後ろにはどんな人間が隠れていたのか？ 彼はクラウン芸術にどのような貢献をしたのか？ フランスでどれくらい生活したのか？ フランス人が向けた差別的な視線に苦しんだのか？ 準備している演劇作品のために、私は少なくともこれらの質問に何らかの形で答える必要があった。国立図書館の目録で、私は1907年に出版された子供向けの挿絵つき本『フティットとショコラの回想録』を発見した。そこで初めて「ショコラ」とは、19世紀末にパリで道化師となったキューバ生まれの若い奴隷のあだ名であり、彼がジョージ・フティットというイギリス人道化師とデュオを組んでいたことを知った。

私は演劇的要素を取り入れた講演会という形で作品の初稿を書き、私自身も、ミュージシャンとシヨコラ役を演じる役者と共に、舞台に立った。初めは、それ以上のことをするつもりはなかった。挿絵つき本の作者であるフラン＝ノアンが黒人道化師にインタビューを行ったのは事実だが、おもしろ

くするため、この道化師の言葉を大きく歪<sup>ゆが</sup>めていた。当時、「ニグロ」というのはいつでも冗談の種だったからだ。それでも、シヨコラの比類ない運命に私は興味をそそられた。新聞でさらなる情報を探すと、「シヨコラ」はベル・エポック期「主に19世紀末から1914年第一次世界大戦勃発までのパリが繁栄した華やかな時代」パリのシヨー・ビジネス界の中心にいた人物だったことが分かった。道化師だが、ダンサーで歌手でもあり、首都で最も名高い場所のひとつヌーヴォー・シルク座で20年ものあいだ花形を務めた。彼は、ルイ・フィリップ王の息子や大臣・議員お歴々の前で演じた。パリの貴族たちのサロンで、カフェ・コンセール「ベル・エポック期のパリで流行<sup>はや</sup>った、お酒を飲みながら様々なスペクタクルを観る店」で、ムーラン・ルージュで、オランピアで、フォリ・ベルジュールで、パリの大きなサーカスや劇場で、そしてオペラ座でも演じた。映画の黎明<sup>はいてい</sup>期にも深く関係したし、パリの病院でセラピー診療に携わった最初の道化師だった。フランス共和国は謝意を込めて彼に勲章を授けた。つまるところ、このアーティストは、20年後に登場するジョセフィン・ベイカーよりも人気者だったのだ。だが、いまでは誰も彼のことを覚えていない。彼の名前はいかなる辞典にも出てこない。

これら最初の研究成果に基づいて、私は「シヨコラ」に関する最初の本を執筆し、2012年出版した。だが、未完成だという感触が残った。著作では、当時の人々に「ニグロ道化師」と呼ばれたこの人物のイメージを主に扱った。しかし、それでは十分ではなかったのだ。研究の過程で、彼がその人生の終わりに、忘れられていくことにどんなにか苦しんだことを、私は発見していた。彼に公正であるために、与えられた役どころの陰に隠されたひとりの人間の運命をたどる必要があると私は感じた。

## 両親も名字もないハバナ生まれの奴隷

奴隷で、黒人で、外国人で、道化師であるラファエルは名字を持たず、6年にわたってどんなに調査しても、私は彼に関する文書をひとつも公文書館で見つけることができなかつた。だが、この男は、パリで最も有名なアーティストのひとりだつたのだ。そして当時のパリは世界の文化的首都と見なされていた。

調査を続けるにあたって、私は歴史家が通常用いる史料を得られなかつた。とはいえ、私には小説家が使う「本当の嘘」という類（たぐひ）の能力を発揮することもできなかつた。そのため公文書館の沈黙は、ほかの道を進むことを私に余儀なくした。なんらかの新しい史料を見つめる必要があるというだけでなく、私は歴史家の「領域」の境界に足を踏み入れなければならなかつた。心躍りつつも危険な、歴史と文学を隔てる境域にである。研究に費やした6年間、私はあちこち飛び回り、ラファエルが生きたすべての場所を訪ねた。彼の子孫たちの記憶を呼び起こそうと努力し、彼の足跡を見つめるために膨大な印刷物を渉獵（しやうりやう）し、世界じゅうの大勢の同僚たちに助けとアドバイスを求めた。彼らはいつとも私に気前よく応えてくれた。

キューバの首都ハバナへの旅に、私の主人公についての新事実を発見できるかもしれないという希望を持っていたわけではない。すでに数年にわたり遠くパリからの調査は行っていた。奴隷制を専門とする歴史家たちが手伝ってくれたが、芳（かんば）しい結果には結びつかなかつた。フランスでもキューバでも彼の足跡は公文書館にはなかつた。私は、ただ彼が生まれた街の雰囲気に入り、彼が生きてきたであろう場所をこの目で見たかつたのだ。奴隷としての彼の過去が、その先の人生にどのような作用したのか、フランスで花開くアーティストとしての才能をどのように育んだのかを理解したかつた。

フランソワアンという作家が書いた『フティットとシヨコラの回想録』では、「ある黒ん坊（ネグリオン）の苦難」というタイトル——これ自体が著者の偏見を十分に示すものである——でラファエルの子供時代に一章が割かれていた。フランソワアンはベル・エポック期の狭いパリの文学界における非常に典型的な作家兼ジャーナリストだ。この光の都が世界の中心だと信じて疑わない。彼は、インタビュー相手の言葉を自分自身の自民族中心主義的な読み方にとらわれたまま解釈し、歪めてしまった。けれども、彼の本がほぼ唯一の私の史料であったから、それに私は真剣に向き合い、真実と嘘を選び分けるために一字一句読み解いていく必要があった。

「シヨコラはハバナで生まれたが、名字はなかった。ただ名前のみ、ラファエルと。それが両親が残してくれた唯一のものだ。両親？　彼は一度も会ったことがない。自分の正確な年齢さえも知らない」

身元登録が存在しないという事実は、著者がそのような言葉は使っていないとしても、シヨコラが奴隷出身であることを窺うかがわせている。様々な情報から、彼は1865年から1868年のあいだに生まれたであろうことを私は突き止めた。その20年ほど前からフランスの植民地では奴隷制は廃止されている。アメリカ合衆国では、まさに南北戦争が反奴隷制支持者の勝利に終わろうとしているところだ。しかし不幸なことにキューバでは、趨勢すうせいはむしろ真逆だった。1840年代から1860年代は、拡大さなかのサトウキビ産業に必要な労働力を提供するため、奴隷制が再び盛り返していた時期だった。16世紀初頭以降、83万人以上がアフリカ大陸からこの島に連れてこられていた。彼らの多くが中央アフリカの出身だったが、19世紀には、製糖産業拡大に伴うキューバの転換期が、ナイジェリアのオヨ王国「1400年ごろから1905年まで、ナイジェリア南東部を支配した王国」の衰退期と重なっていた。西アフリカのこの地域で生活していたヨルバ人（ハバナでは「ルクミ」と呼ばれる）が、まさに

大規模な黒人奴隷売買の対象となった。彼らは自分たちの伝統のすべてを移送先の国に持ち込み、アフリカの諸文化をその地で再び活性化させていく。

### キューバでのラファエルの足跡

ラファエルが子供だった頃、製糖プランテーションにおける奴隷の生活は過酷を極めていたが、彼はその地獄のなかにはいなかっただろうと思われる。フランシスコ・アンは、著作のなかで、「小さな黒ん坊」は「彼が養母と呼ぶ大きくて力強い黒人女性に預けられ、育てられた」と記している。この4年後にラファエルに生い立ちを尋ねたあるジャーナリストは、日刊紙『ジル・ブラス』紙面上で、彼がハバナで生まれたことは確認しているものの、子供時代に関しては少し別の見方を提示している。「母親は彼がまだ幼いときに亡くなった」。「ラファエルを育てたのは彼の主人だった。売る以前は、彼を小さな使用人として扱っていた」。

「養母」と「小さな使用人」というこれらの単語は、ベル・エポック期のフランス人ジャーナリストたちが全く理解していなかった社会的現実を実は示している。1835年に書かれたファン・フランシスコ・マンザーノの自伝——19世紀のスペイン領カリブ地域における奴隷の手による唯一の書物——を読むと、これらの単語が意味するところをもっと理解できる。マンザーノはあるプランテーションに生まれたが、まだ幼いときに母親の手から離れ、ハバナの「養母」の家に預けられ、幼い女主人サンタ・アンナ侯爵夫人に仕えたという。当時、幼い奴隷が同年代の主人の専属使用人兼遊び相手として連れてこられることはよくあった。

私は初め、ラファエルも幼い頃こうした道をたどったのではないかと想像した。この仮定が頭にあつたため、幼い奴隷たちが「小さな使用人」として働いていたコロニアル様式「スペイン統治時代に

見られる建築様式で、ベランダや白い壁が特徴」の邸宅のひとつを訪ねることから、私はハバナ滞在を開始した。ガイドブックに従って、ムライア通り107番地のロス・コンデス・デ・ハルコ邸に向かうことにした。この私邸は18世紀初頭に、あるスペイン貴族によって建てられた。その1世紀のちには、マリア・メルセデス・デ・サンタ・クルスという女性が住んでいたが、彼女はフランス人貴族と結婚しメルラン伯爵夫人となった。私は、彼女が回想録（1833年出版）のなかで描写した空間を、実際に自分の目で見てみたかった。

現実には、この訪問は、歴史家としての想像力を掻き立てるといっても、「記憶の場」をどう捉えるべきかということをし、私に改めて考えさせるものとなった。ガイドブックには、この大邸宅は「修復」されたとあった。その場に着くと、ビエハ広場に臨む完璧に改修されたアーケードと列柱つきの壮麗なファサード「建築の正面」や最初の中庭（パティオ）を見ることができた。しかし、ロス・コンデス・デ・ハルコ邸のほかの部屋は見学できなかつた。入り口で案内をしていた学生が、それらがまだ工事中であることを教えてくれ、邸宅の簡単な歴史を説明してくれた。

19世紀末にクリオーリョ「スペイン領植民地において、スペイン人を親として現地で生まれた人々」のブルジョワ階級「19世紀以降の産業の発展のなかで、一定程度の財産を有するようになった市民階層。貴族、労働者と区別される」がキューバで権力を奪取した際に、彼らはコロニアル様式の旧市街から出て、ハバナ西側に位置するヴェダド地区に、今日でも賞賛の的<sup>まじ</sup>になっているヴィラをいくつも建設した。数世紀にわたってスペイン帝国の至宝であった旧市街ハバナ・ビエハは、こうして見捨てられた。公共投資が始まり、世界でも稀有<sup>めづ</sup>だったこの地区の建築遺産をそのまま維持することは不可能となった。わずかな資金で壁の亀裂が大まかに修繕され、居住空間を増やすために部屋や中庭が細かく仕切られて、大邸宅や美しい屋敷は社会住宅へと変わり、キューバの庶民が住むようになった。しかし、19



ラファエルが生まれ育った19世紀半ばのハバナ

80年代初頭に、旧市街はユネスコの世界遺産に指定された。野心的な改修計画が始まり、その結果が、現在私たちが目にする姿である。

キューバ政権は、個人による所有を許可することで、この政策をさらに推し進めた。現在ではますます多くの人がこれら不動産資産を改修し、観光客に貸し出そうと躍起やっつきになっている。滞在者に要求する1泊分の料金（25ユーロから30ユーロ）は、キューバの公務員のひと月分の給料とほぼ同額である。こうした状況下では、観光業の発展は確かに頼みの綱なのだろう。ハバナ・ビエハのすべての通りに、改修中の工事現場があり、至るところに「貸し部屋」と書かれた看板がぶら下がっている。

ときに同じ通りのなかにさえ現れる過去・現在・未来の交錯が、ハバナの都市景観を奇異で意表をつくものになっている。古い邸宅の大半はいまだ廃墟のままだが、完全に復元されたものもいくつがある。とはいえ、多くの場合、植民地時代の遺物は、時間の経過のなかで都市空間が獲得してきた多様な様式の歴史を反映させた、不調和で雑多な建築様式のなかに取り込まれている。

メルラン伯爵夫人の邸宅は、ハバナで現在進行形のこの過渡期をそのまま映し出していた。20世紀を通じて、邸宅は工場となり、学校となり、ホテルにも変えられた。現在復元されたわずかな部分だけしか観光客は訪れることができず、残りの部分は壁に隔てられて見ることができない。

ムライア通りは、シリロ・ビヤベルデの有名な小説『セシリア・バルデス』（1839年刊）のなか

で、ハバナで最も活気のある大通りのひとつとして描かれている。多様な商店が軒を連ね、あらゆる人々が集まっていた。石畳を走る車輪や馬の蹄鉄の響きが、風を通すために開け放たれた家々にやむことのない轟音を届けた。喧騒は、叫び声やら悪態やらで一層ひどくなった。さらには、荷車や馬車が衝突し、奴隷たちのあいだで喧嘩が始まるのだった。良家の若い娘たちは、「ヴォラント」と呼ばれた軽馬車に乗って移動していたが、決して道路に降り立ちしなかつた。靴が欲しいときには、足を少し振れば、すぐに店員が飛んできて用を聞いてくれるからだ。

矛盾するようだが、現在では、商店の並ぶ大通りに1世紀前ほどの交通量はない。馬車は姿を消し、自動車はいまもまだ珍しいからだ。ハバナで現在最も利用される交通手段は、「自転車タクシー」だ。それはかつての「ヴォラント」を思い出させるが、自転車のペダルを漕ぐ人間が馬に取って代わり、植民地エリートがいた席には観光客が座っている。

私はオフィスオス通りを歩き続け、ハバナ旧市街の歴史的心臓部アルマス広場までやってきた。この改修工事は完了していた。観光客を満足させるために、修復政策では旧植民地政権のふたつの柱、すなわち軍隊と教会に関わる記憶の場を優先させているのだ。

旧市街を歩いていると、軍隊にまつわる過去ののしかかるような存在感に驚かすにはいられない。港を見張るふたつの要塞、プンタ要塞とモロ要塞は、いまも往時の場所にある。アルマス広場のすぐ近くには、完全に改修されたフェルサ要塞があり、ハバナで最も多くの観光客を集めている。スペイン王フェリペ2世によって1558年に建立された、アメリカ大陸全体のなかで最も古い石造建築である。すぐ近くに宮殿を持つ植民地総督は、おかげで十分に警護されていたわけである！

これら軍事関連の遺跡は堂々としたものではあるが、ラファエルが子供の頃のハバナでスペイン軍が果たしていた役割について、多くを教えてくれるわけではない。住民は、高台に存在する無数の要

塞、砦、砲台、砲塔に常駐する数千人の兵士の監視のもとで生活していた。24時間常に650もの砲台が街に狙いを定めていたようだ。ハバナに駐屯する5師団の兵士が毎日アルマス広場で観兵式を行い、軍歌が民衆たちを喜ばせた。

現在は市立博物館になっているスペイン総督宮殿の中庭にいまも納まっているクリストファー・コロンブスの像にぼんやりと目を向けたあと、私はメルカデレス通りを北上し、大聖堂の前に出た。植民地政府は、軍事力だけでなくカトリックという宗教にも依拠しながら、数世紀にわたってキューバ民衆の上に君臨した。私が数えたところ、旧市街には少なくとも12の教会があった。18世紀に建てられたサン・クリストバル大聖堂には、そのなかでも最も美しい装飾が施されている。しかし、私は、かつての日曜の朝の礼拝の様子を思い浮かべずにはいられなかった。白人の主人がミサに参加するためにこの場所に足を踏み入れるとき、彼らの小さな奴隷は祈禱台や典礼書「ミサに関する儀式や儀礼の規範書」を手にその1メートル後ろを歩いていたのだらう。ふと高位の人物の葬列に関する話を思い出した。そこでは、馬車を引く黒人御者もまた礼服を着用していた。光沢のある三角帽子に、白い毛織物製のぴったりしたキュロット、金か銀の飾り紐がたっぷりついた赤または青のジャケット、黒革の巨大なゲートルといった具合だ。この格好は奴隷たちのコミュニティで賞賛の的だった。誰もがいつか白人貴族階級に仕えて、豪華な服を着てみたいと夢見た。おそらく小さなラファエルもこうした場面を見たことがあったのではないか？ だとしたら、パリで道化師になった彼が、美しい舞台衣装に熱心だったのもうなずける。

私は大聖堂の前には長くどまらず、早々にそこから500メートルほどのクアルテレス通りにある別の教会を目指した。前述した小説『セシリア・バルデス』のなかで、ビヤベルデは、聖ラファエルの日である10月24日にサント・アンヘル・クストディオ（守護天使）教会で行われた儀式について

詳述している。北からの風によってフロリダからの渡り鳥たちがこの日にすでに浜辺までたどり着いているのは珍しいことではなく、それは対岸にはもう冬が訪れていることの印しるしでもあった。あらゆる階層、あらゆる出自の巡礼者たちが、この日に教会で顕示せいいぶされる聖遺物せいゐぶつ「聖人の遺骨や着衣などの遺物」を目にしようとあふれかえっていた。白人は馬車で、黒人は徒歩で。こうした縁日には、クアルテレス通り沿いにずらっと並ぶ屋台の前で人々が押し合いへし合いしたものだ。アフリカ出身者たちは、ヒマラヤ杉の板の上でトウモロコシのガレット「クレープの一種」を売っていた。

### 当時のキューバとはどんな街だったか

私はさらに進んで、旧市街と中心地を分けるパセオ・デイ・マルティ大通りに達した。19世紀にはエル・プラド「スペイン語で「草原」の意」と呼ばれていた。パステル色の美しい邸宅が並ぶこの広い通りには、キューバ人が乗合タクシーのりあひとして使っている1950年代物のシボレーやキャデラックといった「アメリカ車（ベル・アメリカーヌ）」が走っている。

ラファエルが子供だった頃、エル・プラドは、植民地の上流社会の人々が好んで散歩していた場所だった。さしずめキューバのシャンゼリゼである。良家の若い婦人たちはモスリン「薄手の綿織物」の服を着て、髪に花を挿し、この通りを行き来した。肩と腕を出し、白い肌を惜しげもなくさらしたが、彼女たちの豊かな髪はといえば、キューバ人に身近な鳥ウタムクドリモドキの羽根のように黒いのだった。ビジネスマンたちは「ル・ルーブル」という名の高級カフェで待ち合わせた。毎夜、アイスクリーム屋のテラスには人があふれ、炭酸レモネードやグアナバナという南国の果物のアイスクリーム、シャンパンで凍らせたパイナップル、それに卵黄のお菓子ドウルセス・デ・イエマなどを味わっていた。



かつてのタコン劇場の内部

ハバナは、スペイン植民地帝国の真珠、「アンティル諸島のパリ」、享楽と踊りと賭け事の街として知られていた。エル・プラド大通り沿いには、ヨーロッパやアメリカからの裕福な観光客が宿泊する高級ホテルが建ち並んでいた。今日ではハバナ大劇場と名前を変えたタコン劇場は、世界でも稀に見る広さと絢爛さを備えており、ショー・ビジネス界の殿堂だった。ヨーロッパの名だたるコメディアン、ミュージシャン、ダンサーや歌手が定期的に招かれた。白人エリートたちの娯楽場は今日完全に復元され、古き良き時代と同じように観光客を集めている。

ここで、私はその近くのフラタニダード公園まで足を進めた。そこにはアメリカの解放者たちの胸像がある。シモン・ボリバル、ホセ・デ・サン・マルティン、ベニート・フアレス、そしてアブラハム・リンカーン。19世紀にこの場所はカンポ・デ・マルテ（練兵場）と呼ばれていた。スペイン連隊はここでも観兵式を行っていたのだが、港に不法に連れてこられた奴隷たちがこの場所に陳列されていたことも私は知っていた。歴史家たちによれば、最後の奴隷船がハバナに横づけしたのは、1873年である。6歳から8歳のあいだだったはずのラファエルもまた、バスク人の密売商人フリアン・スルエタのもとで行われていた恐ろしい「奴隷の行進（ネグラダス）」の場面に遭遇したこともあったのではないか？ 数百人の奴隷たちが歩いて島じゅうを横切り、プランテーションに向かった。政権は見て見ぬふりをしていった。

## 黒人蔑視に満ちた、あるフランス人ジャーナリストの記録

小さなラファエルが、ハバナの植民地エリートのもとで生活していたのではないかというシナリオに、私は初め魅了された。そう考えれば、彼が大人になったときにパリの貴族たちとうまくつき合うことができた理由を説明する、ひとつのヒントになると思ったからだ。しかし、この解釈は実際のところは疑わしかった。もしラファエルが上流社会の白人一家に仕えていたのだったら、その時代のいくつかの思い出をフランソワアンに話して、不思議はないが、そのような事実はない。道化師シヨコラの子供時代について、ノアンが書いているのは次の通りだ。「ラファエルはハバナの庶民的な界限で大きくなった。そこには養母のあばら家があり、ラファエルは朝から夜までふらつき、ほかの少年たちと些細なことで喧嘩をしていた」。さらに、ノアンによれば、ある日、スペインに向かう予定のひとりのヨーロッパ人が仲間たちと悪ふざけをしているラファエルに目を留めた。少年の力強さに驚き、その養母のところを訪れた。「彼を買いたいんだがね、いくらだい？」黒人女は耳を疑って、質問を聞きなおし、今ではラファエルを限りなく愛するようになっていたので彼と離れることなど決心できず、そんなことになったらとても耐えられないだろうと思った。けれども最終的には、18オンスの値段で合意した」。

親愛なる読者よ、あなたもこの文章を読んで腹が立ったに違いない。私も憤慨した。フランソワアンは、フランス共和国の子供たちに向かって、階級と人種という二重に自民族中心主義が刻印された世界の見方を伝えている。彼はキューバの奴隷の世界を、当時の新聞が「ならず者」を描くのと同じやり方で表現している。郊外の若い労働者階級は喧嘩っ早く仕事もまじめにしないと考えられていた。そして、ラファエルが「黒人女（ネグレス）」によって育てられたから、その家は「あばら家」に違

いないのだった。そう、つまるところ、このパリのジャーナリストは、ハバナの庶民地区とはベルヴィル「1860年にパリ市内に統合された、東部市壁近くの労働者地区」のアフリカ人街のような場所だと想像していたのだ。彼によれば、もちろん「黒人女」は愛情より財布の中身が大事で、わが子に対して母親らしい感情など覚えることもなく、数枚の金貨ですぐにその子を売ってしまうのだ。

この一節は実に我慢ならず、私は本当に不愉快だった。この文章をベル・エポック期パリのエリートの人種差別的偏見を告発するために使うことはできるだろう。けれども、この唯一の史料からでは、ラファエルの本当の物語のその断片さえも見つけ出すことは不可能なように思えてきた。このときから私は、自分の主人公とのつながりを作るためにどんな小さなことでも日記をつけることにした。

2009年1月13日火曜日

親愛なるラファエル

私は君に手紙を書くことにする。君の助けが必要だ。劇の小品を書くことを承諾したとき、私はフランシノアンの本から信頼できる情報を見つけられると思っていた。だが、残念なことに、彼が読者に紹介したのは君の「回想録」ではなく、彼自身の黒人世界に対する幻想だった。次に私はサーカスに関する歴史書のなかに君についての情報を探した。無駄だった。どの本も、言わないだけか知らないのか、フランシノアンの作ったステレオタイプをなぞるだけだった。人生の最後に君がシルク・ド・パリで働いていたとき、観客のなかに、レイモン・デプレという名の子供の顔を見かけたかもしれない。第一次大戦後に、彼は作家兼『ユマニテ』『フランス共産党の機関紙』の記者になった。そして、トリスタン・レミの名で『プロレタリア文学』の推進者となった。この筆名で、1945年に彼は道化師に関するふ厚い本を出版し、丸々1章を「フティット

と「ショコラ」に割いているんだ。そのなかで君は、ばかで可哀想な黒人、いつも殴られているの  
にいつも笑っている、フテイトのいじめられ役として紹介されている。私は、いまでもこの本  
が道化師の歴史の主要文献であると知って驚いた。どの図書館にも置いてあるし、本屋でも売ら  
れている。

私たちの劇では、こういったステレオタイプを批判するだけでなく、君がそれにどうやって立  
ち向かい、笑いを武器にして乗り越え、人気アーティストとなったのかを見せたかった。だけど、  
私が持っているショコラという人物に関する情報といたら。君の本当の人生については何も分  
からない。いままでの研究のなかでも、確かにこういう困難はあった。移民たちは表立って声を  
上げることがないから、文書館で彼らの足跡をたどるのはとても難しい。だけど、かつての移民  
たちに彼らの思い出を記録するように促すことで、こういった欠落を埋めることは可能だ。

だから私はいまこうして君に書いている。私に話してくれないか。そうしないと、君の真実の  
話を語ることができない。君がもうこの世にいないことはよく分かってる。だけど、それがなん  
だというのだ？ 君はおそらく知らないだろうが、歴史家も霊と交流できるんだ。歴史学の父ジ  
ュール・ミシュレは、死者たちと会話するために文書館で幾晩も過ごした。そこで着想を得たと、  
語っている。

2009年1月、私はまだ調査の入り口にいた。そのときはまだ歴史学の作法と文学のそれをどの  
ようにすり合わせればいいのか分からず、なぜラファエルは私にちつとも答えてくれないのだろうと  
頭を悩ませていた。前に進むためには、フランソワの本を解析していくほかなかった。

幾人かの親切な同僚が、この謎に満ちた物語の糸を解きほぐすヒントをくれた。彼らは、私の奴隷

制に関するイメージが、19世紀初めの文章と、ハリウッド製映画が今日流布する表現に影響されすぎていると指摘した。ラファエルが生まれた1860年代のハバナ社会は、その40年前にメルラン伯爵夫人やシリロ・ビヤベルデが描いたものとは、もはや同じでなかった。キューバ島にはいまや80万人の人が住み、そのうち15万人がハバナに居を構えていた。軍人家系の貴族や大土地所有者は、街に対して依然強い影響力を保持していたものの、そのほかの白人の多くは、貧しさから移住してきたスペイン人農民の子孫だった。彼らは、商店主、職人、雇われ人、労働者だった。キューバで生まれた者たち（クリオーリヨ）は、とりわけ労働市場での顕著な差別を理由に、植民地支配に対する不満を募らせていた。数の上ではスペイン人の3倍にも上るクリオーリヨが、公共領域の雇用に占める割合は5分の1でしかなかった。キューバ独立のための闘争を始めた多くが、この階層出身の白人系住民である。

新しい移民が流入すると、富裕層は旧市街ハバナ・ビエハを捨てゼロ地区に移り住んだ。1870年代初頭、最も裕福な者たちは、さらに西にある海岸沿いのヴェダド地区に豪華なヴィラを建て始めた。1901年にエル・マレコンと名付けられた遊歩道が8キロにわたって整備され、いまでは高級ホテルが並んでいる。

およそ5万人を数える黒人はハバナ住民の3分の1を占めたが、彼らも決して均質な集団ではなかった。1870年代初頭、黒人の半数は「有色自由人」というカテゴリーに属していた。その多くは、16世紀以降キューバに連れて来られた奴隷の子孫である。有色自由人の数が大きく伸びた理由は、妥協したスペイン政権が、すべての高齢者と1868年以降に生まれた子供を解放する法律を施行したからである。ラファエルは、運がないことにこの日付の少し前に生まれていた。

キューバでは、奴隷の所有者は白人貴族だけにとどまらなかった

私たちが現在持っているイメージとは異なり、奴隷の所有は白人貴族の特権では必ずしもなかった。私が扱う時代のハバナには、1万人の主人に対し、3万人の奴隷がいた。すなわち、職人、商店主、雇い人といったつましい暮らしをする者のなかにも、奴隷所有者が一定数いたのである。その大半は白人であったが、なかには有色自由人もいた。とはいえ、白人であろうと黒人であろうと、これら少数の中流階級層は、奴隷の維持が可能なほど裕福とは限らなかった。彼らは、お針子、家内使用人、乳母、荷物運搬者として奴隷を貸し出し、余剰収入を得ていたのである。

この第三者への貸し出し契約により、従属関係はより流動的なものとなった。ハバナの奴隷の多くが、日曜日に耕す小さな畑を所有していた。稼いだ金を貯めて、自由を買い戻すことを夢見た。次第に、法律的に中間に属する人々の数が増えていった。同じ黒人家族のなかにも、自由人、奴隷身分の妻、異なる身分を持つ子供たちがいた。男性に対して妻であり奴隷でもあるという女性のケースも存在し、また、自分の家族を奴隷としている黒人たちもいた。ハバナには、ほぼ賃金生活者とも言える奴隷たちがいる一方で、限りなく奴隷に近い状態に置かれている自由人もいた。その顕著な事例が、19世紀中葉以降キューバに連れて来られた12万5千人の中国人クーリーである。彼らは8年の労働契約にサインしていた。契約を破棄する自由は表面上あったが、帰国するのに十分なお金を稼ぐことができず、悲惨な状況から抜け出せずにいた。過酷な扱いからある程度身を守るのに十分な強いつながりを持つたコミュニティをすでに形成していた黒人とは異なり、極めて孤立した環境に置かれていた中国人はダイレクトに人種差別にさらされた。1日の仕事が終わりに、彼らが街の路地を歩けば、誰もかれもが嘲りの言葉をぶつけた。とりわけ黒人の労働者も白人の労働者も、酔っ払っては、酒場で彼らに喧嘩

を吹っつけた。これらクーリーの自殺数が最も多かった。

19世紀半ばのハバナの奴隷制に関するデータは、フランシスコ・ノアンの言葉の信憑性しんぴやうを裏づけるものだった。確かにラファエルが「養母」の奴隷であった可能性はある。とはいえ、彼女が自分の子供をちよつとしたお金のために売ってしまったという点は受け入れがたい。

このパリのジャーナリストには、「黒人女」あるいは「黒ん坊」の立場に立つて考えることはできないのだろう。彼らのことを生身の人間として捉えずに、ヨーロッパ人の幻想を煽あおるのにちようどい劇中人物もしくはステレオタイプとしてしか考えていないからだ。だからフランシスコ・ノアンは、ラファエルが彼に話した内容を理解できなかつた。「お金のために」という仮定を退けるために、「母親が子供と離れざるを得ない状況とはなんだろう」という問いをここで立ててみよう。ノアンの話の次の言葉から、私は別の説明にたどり着いた。「シヨコラは幼い頃から、憲兵たちの前からは全力で逃げなければならぬということを知っていた」。奴隷たちの用語法で、「逃げる（フュイール）」という動詞は明確な意味を持つ。それは、スペイン語でシマロン、すなわちプランテーションから逃げ出した「逃亡奴隷」と呼ばれる人々を連想させる動詞なのである。1868年に起こった「栄光の革命」「砂糖工場所有者のカルロス・マヌエル・デ・セスぺデスが自身の奴隷の解放とスペイン帝国からの独立を宣言したこと」を機に、ハバナでは独立のための「10年戦争」が始まった。多くの奴隷が蜂起側に加わり、自分たちが使役されていたプランテーションを焼いた。スペイン当局から犯罪者と見なされたシマロンたちは、弾圧を逃れるために山中に潜んだ。彼らの多くが自分の子供と離れ離れになった。親戚のついで、子供たちはハバナの下町に住む「養父」「養母」のもとに預けられ、「孤児」として育てた。こうして、別のシナリオが私の頭のなかで形を取り始めた。シマロンの家に生まれたラファエルは「養母」のもとに預けられ、彼女はお金のためではなく、ヨーロッパでのよりよい運命を願ってラ

ファエルを売ったのではないだろうか。

街の歴史に関して記したメモを丹念に読み返してから、私は港の区画を歩き回った。フランシスコンは著作のなかで、ラファエルを買ったヨーロッパ人商人は、中継のためにハバナに一時滞在していたと述べている。ラファエルと商人は、きつとこの埠頭ふたうか周辺の路地で出会ったに違いない。今日、港周辺は、海上交通と近くの工場のせいでひどく汚染されている。湾の向こう側には、昼夜を問わず製油所の炎が見える。

旧港の再開発計画が始まったのは2009年と最近だが、すでにその成果はあがってきている。税関の古びた建物の破損した正面部分に誰かが描いたチェ・ゲバラの肖像はもうすぐ消され、「忠実に」再現されたこの記憶の場は、黄金時代の植民地港湾の姿をよりはっきりと観光客に想像させるだろう。

### 困窮にあえぐ人間に一片の同情も感じない白人ブルジョワの印象記

私は、ようやく幼いラファエルが生きていた、まさにその場所にたどり着いた。彼を大西洋の向こう側へと連れていった蒸気船が錨いかりを下ろしていた船着き場だ。当時、3週間の航海の末に港にたどり着いたヨーロッパ人は、そのコスモポリタンな雰囲気ふんいきに驚いたに違いない。

フランス人旅行者たちが残した文章は、人種的特徴を捉えた語彙ごいを用いて港で見られる多様性を描写している。例えば、ジョルジュ・カロンという旅行者のひとりが驚愕したのは、次のようなことだ。

「短い丈の服を着た黒人たちがうろうろしてる。さらに、裾が地面に届く服を身につけた中国人、レモン色の肌のキューバ人や、白い服にクラシックなパナマ帽を被った、日焼けしたスペイン人も。サン・カルロス、デ・エウロパ、デ・イングラテラ、デ・イサベル、デル・テレグラフォといった最高級ホテルを獲得しようとする叫び声、喧嘩。客船の顔見知りが私に言う。『恐れる

ことはありませんよ。あなたも罵倒し、喧嘩しに行けばいいのです。そこで、私も罵倒し、喧嘩し、ある程度の成果を獲得した。今は、6人の男が私の鞆かばんを運ぼうと争っている」

この一文を読んで、私は「喧嘩（バタイユ）」という言葉にすぐに気づき驚いた。フランシノアンも同じ言葉を使って、ラファエルが「朝から夜までふらつき、ほかの少年たちと些細なことで喧嘩（バタイユ）をしていた」地区のことを描写していた。

「喧嘩する（バタイユ）」というフランス語の動詞は、ハバナの市井しせいの人々が生き残るために奮闘することを指すのだらう。御者、荷物運搬人、雑役、色ガラス細工売り、くじ売りなど多種多様な人々が、白人旅行者が港に着くやいなや注意を惹ひこうと熾烈な競争を開始する。小さな奴隷たちもまた、この幾重にも危険な争いに飛び込んでいく。埠頭や近接道路を優雅に走り抜けていく馬車に気を付けなければならぬ。巨大な樽たるを猛スピードで運んでいく荷物運搬人も危険だ。しまいには、運搬中に小麦粉の樽が壊れたとか、荷馬車が道路で積み荷を落としたとかいったきっかけで始まる乱闘に巻き込まれることもある。

フランシノアンは小さな「黒ん坊」に関する章で、ラファエルが近所で「最もぼろを纏まとっていて、食べるものも十分になかった」とも記している。1870年代のハバナの住民に使われる際の「ぼろを纏う」という言葉が何を指すのかを、私は様々な旅行記を読んで探そうとした。そして、1889年に出版された作家エルネスト・ド・レピヌの作品のなかに、次のような一節を見つけた。

「醜みにくい人間のあらゆる見本がその場所に集まる。コンゴ人、マンディカ人、ソファアラ人といった、しし鼻でずんぐりとして足が曲がったニグロたち、狭い額ひたいに、突き出た頬ほ、がっちりした上半身にひよろ長い脚、縮れた髪に、膨らんだ腹、べたべたした肌。

すべてがそこにある。肌の黄色い中国人、かさかさしてか細く、平たい顔、髭ひげの生えない顎あご、彼らはただ静かに黙々と働く。一方で、黒人は突然けたたましく笑い、真っ白な歯を見せるが、それらは殴られたか小刀の一撃のせいで不ぞろいだ。

それにしても、なんという浮浪者どもだ！ 彼らの思い出は私に吐き気を起こさせる。ぼろを纏ったこの年寄りども、ゴリラだって親戚にするには恥ずかしいぞっとするほど醜い黒人女たちを知らぬ者は、おぞましい醜さというものを知らないのだ。この生き物たちは、敬意も憐みあわれも起こさせない」

この文章を読みながら、フランス人として私は少し恥ずかしくなった。キリスト教徒であると称し、あるいは「共和主義者」であると宣言する一方で、困窮にあえぐ人間に対して一片の同情も感じないこの白人ブルジョワ階級の、自分はある意味で「継承者」なのだと考えると。しかし、こうした人種差別的言説の告発に留まっただけでは、まさにこの作家が選んだ枠内にしかいられないだろう。堪たえがたい筆致で彼が描いた人々のあまりに悲惨な様子は、街の南、港と湾と兵器廠しょうに挟まれたサン・イシドロで生きる人々を正確に表現していない。住民たちの多くは労働者や職人の白人や有色自由人であり、今日でも「ソラール」と呼ばれる小さな中庭つきの、正面が隣同士接した2階もしくは3階建ての家に住んでいた。

### 敬虔な宗教意識に基づいて結びつく、サン・イシドロの住民

サン・イシドロ地区に足を踏み入れて、私は雰囲気が変わったと感じた。空気はより湿り気を帯び、教会やコロニアル様式の美しい家の数は減り、復元政策の影響はあまり見えない。この街区の入り口、



キューバ  
第一次独立戦争の  
英雄ホセ・マルティ

レオノール・ペレス通りで、第一次独立戦争の英雄ホセ・マルティは生まれている。父親は貧しさからスペインを離れた移民の階層に属していた。博物館になっている彼の生家を訪れたかったが、改装のためにここもまた閉まっていた。私は、ホセがこの道沿いでラファエルとある日すれ違っていたという想像を

楽しんだ。彼は20歳で、ラファエルは8歳か9歳だ。この仮定はあながちずれているとも言えまい。サン・イシドロ地区で驚いたのは、住民の社交空間の濃密さである。人々は挨拶し合い、ひと言ふた言交わすためにしばしば立ち止まった。キューバ人の友人たちは、こうした社会的な結びつきの強さを説明する要素として、とりわけ宗教の役割を忘れてはならないと言う。マルクス主義のイデオロギイ的支配が公的には三四半世紀も続いているにもかかわらず、ハバナの住民たちは非常に敬虔だった。ライシテ（政教分離）教育を施された——あるいは植えつけられた——フランス人にとって、日常生活のすべての行動が、スピリチュアリズムに深く根づいた宗教的感情によって導かれ、解釈されている世界を理解するのは難しい。「イク・ロビ・オチャ」「死が聖人をもたらず」。民衆信仰においては、人の霊は死後もこの世をさまよい続ける。どんな人間にも守護霊がついていて、「守護天使」である霊的な父と母を持つ。これらの存在は、その人のアイデンティティの一端を成す。「ブルヘリア」という、己から不幸を取り除く守護的呪術は、日常の振る舞いのなかに深く溶け込んでいる。病気や不運は決して偶然の産物ではなく、霊との交流によって解読すべき予兆なのである。カードを使った未来の予知の仕方や霊と会話するためにトランス状態になる方法といった瞑想術を学ぶことで、信仰者たちはそういったことができるようになるかと考えている。ロウソク、水の入ったグラス、少しの食べ物があればこれらの儀式は可能だ。



キューバの民間信仰「サンテリーア」の儀式

19世紀初期にキューバで奴隷制が再び盛り返した際に、こうした民間信仰も豊かになった。ヨルバ人はサンテリーアを広めたが、この信仰では、秘儀を伝授された人（サンテロ）を通して、神殿（カサ・デ・サント）に住まう神々（オリシヤス）を讃える。弾圧を免れるために、信仰者はカトリックの聖人の名を彼らの神々に与えた。雷と太鼓を司るチャンゴは、火器職人の守護聖人である聖バルバラとなり、オルーラは聖フランチェスコ、ババル・アジェは聖ラザロと名前を変えた。

ヨルバ人はまた、出身民族集団ごとに有色自由人と奴隷を集めて、自助組織カビリドのシステムを作り上げた。ラファエルが子供だった頃、いくつかのカビリドはすでに強い影響力を持っていた。土地や建物を所有し、港湾における労働者の雇用まで一部コントロールしていた。これらの組織は収入の一部を使って奴隷の自由を買い戻し、1万1千人以上の奴隷がカビリドを通して解放されたと推計されている。

サンテリーアの信仰者は、アシエントと呼ばれる壮麗な儀式を通して、秘儀加入者の段階に進むことができる。これは一種の「聖体拝領」であり、文字通り信仰者の頭に聖人を据え置く。こうして、自身の神と交流できる媒介者になれるのだ。霊の存在は、石、真珠、木切れといった様々な小さなオブジェによって物質化され、箱に収められ、信仰者はこれらを身近に置いておく。同じ神を持つ者たちは同一の霊的家族に属すると見なされ、ひとりの秘儀加入者の保護下に置かれる。この秘儀加入者は、彼らの宗教上の父「パドリノ」あるいは母「マドリナ」とも呼ばれる。自分の「養母」についてラファエルが言及するとき、彼が思い描いていたのはもしかしたらこうした結びつきだ

ったのかもしれない。

## ラファエルのからだに刷り込まれたキューバ独自のリズム

フランシスコ・ノアンが自民族中心的な語彙で「黒人女のあばら家」と呼んだ住居は、実際にはサン・イシドロの「ソラール」であったのだろう。住民たちは定期的に集まり、おしゃべりをし、歌い騒いだ。19世紀にこうした場所でルンバが生まれた。ただし、特定の振付の踊りを指すわけではまだない。ルンバという言葉は、ソラールに住民たちが集まり、食べ、歌い、踊る祝祭的な活動を指した。アフリカのリズムに乗って、手を叩き拍子を取り、クラベス（港で回収された木で作った小さなバチ）を打ち鳴らし、さらにイヤ、イトテレ、オコンコロという大中小3つの太鼓たいこからなるバタを叩く。

カサ・デ・サントで行われる宗教的儀式ではさらに驚くべきことに、音楽や踊りを通したトランス状態がもたらされて初めて、信仰者は神との交流が可能になるとされた。

こうした宗教的儀式は、聖者を讃えるために催される祝祭の際に最高潮に達する。なかでも最も重要なものが1月6日に催される「諸王たちの祭り（エル・ディア・デ・ロス・レイエス）」で、ローマ帝国のサートウルナーリア祭に似ている。ハバナの路地という路地に人々があふれかえり、白人の主人たちは不安を覚えるほどだった。各カビリドが次から次へと、それぞれの守護聖人を担ぎ出し、女王役に手をうやむや恭しく差し伸べた王役を先頭に、練り歩く。参加者たちは歌い踊りながら、ふだんは白人の若い娘たちが「ヴォラント」で行き来する街の美しい大通りに繰り出す。さらに、プラランテーシオン所有者たちの私邸や大聖堂の前を通り過ぎ、アルマス広場にたどり着く。カビリドの代表者たちは、次々に総督宮殿の中庭に入り、恭順きやうじゆんの意を示す。

当時の画家たち、例えばハバナに長年住んだフランス人フレデリック・ミアル、あるいはスペイン



パトリシア・デ・ランダルーセ作「キューバ島の習俗」(1881)に描かれたディアブリトたち

人パトリシオ・デ・ランダルーセが、版画やリトグラフで、このアフリカ起源の儀式的祝祭的性格を後世に伝えている。しかし、フェルナンド・オルテイスのような人類学者たちが、儀式的文化的重要な楽器だった。短く明快な中心のモチーフにリズムを与え、同じ主題に基づいた無限の変奏が休みなく反復される。踊る人々はみな、からだ全体で幸福感を感じ、共に踊る行為で喜びは増幅される。参加者たちが身に着ける衣装とマスクの絢爛さもまた、諸王たちの祭りの壮麗な性格を際立たせる。大げさなまでの装飾品は、主催者が伝えたい「メッセージ」に応じて、ハバナの民衆地区で何か月も前から辛抱強くカビリド構成員によって製作される。また、日常的に実践しているダンスに加えて、

飽くことなく繰り返される練習を通じて、参加者たちは当日には自然に動きや振付に身を任せ、からだを震わせ、トランステイトに至る。あるいは、ディアブリトと呼ばれる様々な目に見えない力に扮しもする。ココリカモ（別名ココリヨコ）などが特に人気で、角のある牛の頭のマスクに、編んだスカート、足首にアンクレットをつけて行列に参加した。そのほかのディアブリトたちもこの日ハバナの路地を練り歩き、小さなパントマイム師たちが、霊たちの深淵な世界を演出した。ラファエルがその人生の最初の数年間を過ごした社会では、踊りは、1日の仕事の後で行う「趣味」といった分離された領域にあるものではなかった。踊りは、人々の社交の中心にあり、社会生活上の出来事すべてが表現される集団的ランゲ

ージだった。アフリカの踊りは、足、胴、腕、手、頭、顔、目、舌といったからだのあらゆる部分を動員する。からだ全体がマイム的表現をしようとして動く。言葉では表せない、ありとあらゆるステップ、ジェスチャー、顔の表情があり、だが踊り手にとって、それらはそれぞれの意味を持っているのだ。生まれたときから、シヨコラはこうしたからだの法則とリズムを自分の内に持っていた。祭りの期間になるとラファエルも、ディアブリトの化身であるミステリアスで威光を放つ踊り手たちに、おそらく自分を重ね合わせてみたりもしただろう。彼らは、演ずる技法を完全に自分のものにした真しんのアーティストたちだった。哲学者ガストン・バシユラールは、子供は最初に上った階段の一步を人生を通じて覚えていくものだと述べている。ラファエルもまた、自分が育った奴隷コミュニティで受け継いだからだの表現法を決して忘れることはなかっただろう。

### 当時のフランス社会に蔓延していた、黒人奴隷への偏見

このサン・イシドロの民衆地区、汚れがこびりついている細い路地裏でラファエルが過ごした日常を、私は想像してみる。家々のすだれが互いに長い糸でつながれ、そこには緑、赤、青で継つぎをあてられた衣服が干されている。雨期である冬でも気温が18度より下がることはなく、夏には30度を超える。暑くて湿気の多いこの環境では、蚊やごきぶり、ムカデが繁殖する。この地区の住民は、さらにゴミを食べあさる赤い顔をしたタカ目のヒメコンドルとの共存を学ばなければならなかった。

造船所のハンマーが鉄や木を叩く音は、堪えがたいほど周辺に響く。毎朝、ラファエルは港の棧橋に向かい、ほかの世界からやってくる乗客を待つ。彼は、湾の中心に滑らかに入ってくる白と黒の戦艦や、セイレーン「ギリシャ神話に登場する、上半身が女性で下半身が鳥、もしくは魚の、海の怪物」やトリトン「ギリシャ神話に登場する海神」、様々な英雄が彫られ彩色された船首を持ち、いくつもの階

が優美なバランスで連なつた大きな商船に目を輝かせていただろう。世界じゅうからやってきた船乗りたちはあらゆる言語で歌いながら、鎖やロープを手繰る。ラファエルもまた「海の向こう」と聞いたとき、夢を見たのだろうか。

1966年、100歳になるキューバ人が奴隷として過ごした若い頃の生活を語った証言を、人類学者のミゲル・バルネが出版した（『逃亡奴隷』〔1968年／学芸書林刊〕）。ラファエルとほぼ同い年のこの男性の話は、アフリカと強制移送の記憶が世代から世代へといかに受け継がれてきたかを示している。

「すべては深紅のハンカチーフがアフリカの海岸の古い城壁を越えた日に始まった。長いあいだ、まるで悪魔が彼らの侵入を阻むかのように、魔の虫が白人を刺してくれていた。しかし、濃い紅色がみんなにわれを忘れさせた。黒人の王たちは白人が深紅のハンカチーフを取り出すのを見たとき、それを欲しいと思った。黒人はいつも赤い色が好きなのだ。そのせいで、彼らは鎖をかけられたのだ。子供たちよ、赤には気をつけなさい」

ラファエルの子供時代を描写したフランシノアンの一節には、「養母」に関する記述で私をさらに不快にした箇所がある。

「この黒人女は温かい人ではなかった。シヨコラがのちに私たちが知る素晴らしいクラウンとなり、平手打ちを受ける仕事をするようになったとき、彼にそのための訓練は必要なかったと言えるだろう。なぜなら、彼の養母が無意識のうちに将来のために最適な教育をシヨコラに施していたのだから。平手打ちがすなわち、彼女がシヨコラに与えたもののほとんどすべてだ」

そのようにからだにプログラムされているから奴隷は叩かれても満足だという偏見が、ベル・エポック期パリの上流社会に広まっていたから、この作者は、自分はうまいことを言ったと思ったのだろ

う。ラファエルは若い頃に受けた身体的暴力の問題について確かに言及したのかもしれない。そして、フランソアンはすぐにそれは「黒人女」によるものだと結論づけた。実際には、この暴力はスペイン政権によって押し付けられた植民地法のなかにある。1886年に奴隷制が廃止されるまで効力があつたキューバの黒人法典は、主人の主要な義務は自分の奴隷にカトリック教義の基礎を植え付けることだと定めている。奴隷は洗礼を受け、カレンダーに従い聖人の名前がつけられ、日曜日と祝日には休息の権利があつた。その代わり、奴隷には主人への従属と恭順の義務があり、破れば身体的な懲罰が待っていた。1842年の規則は、血を流さない程度の25回の鞭打ちに罰を「軽減」していた。

ラファエルがその幼少時に白人貴族のかたわらで生活していたわけではなかつたとしても、彼らの生活様式を身近に見る機会は何度もあつただろう。ハバナの上流社会はいついかなるときも自己を顕示していたからだ。コロニアル様式の邸宅の所有者は、街を覆う堪えがたい暑さを避けるために窓を地面に届くところまで大きく開け、夜の爽やかな風が入ってくるようにしていた。奴隷たちはこうして街路から社交界の様子を窺うことができたのである。

パリから輸入した淡い色のモスリンの美しい服を着、染みひとつない白い肌をした婦人たちは、近いようで遠く、若い奴隷たちの幻想を掻き立てた。この時代、白人貴族がすべてのお手本であり、社会を形作っていた。しかし、人種的境界は、アメリカ合衆国ほど明確に引かれてはいなかつた。キューバではすでに、夜会を盛り上げるために黒人やムラート「白人と黒人との混血」の音楽家を呼ぶことが習慣化していた。メルラン伯爵夫人は回想録のなかで、「エレガントなニグロ、プラシド」と呼ばれたバレエ教師兼オーケストラの指揮者に言及している。この人物は、1830年代にハバナのシユトラウスと目されていた。また、この頃、ヨーロッパの対舞曲「男女のペアが順番にパートナーを交換していき、グループの全員に当たるようにするダンス」がここキューバでも受け入れられて、アフリカ

出身の音楽家たちがそれをアレンジした「ハバナ風」と名づけられたダンスの型が定着した。足だけでなくからだ全体で踊るハバナ風ダンスは大いに流行ったと、伯爵夫人は述べている。

数少ないムラートや有色自由人のエリートたちがキューバの上流社会に溶け込むのに、障害や反発がなかったわけではない。1860年代初め、アメリカのミンストレル・ショーに着想を得たブフォと呼ばれる新しいタイプの演劇がハバナで誕生した。黒人に扮した白人俳優による二人劇である。シルクハットを被り着飾ったクリオーリョ演じる有色自由人の教授のカテドラティコという役は、白人の真似をしようと一生懸命なのだが一向にうまくいかず、その様子が人々を笑わせる。もうひとりの登場人物は下船したばかりのボサル（アフリカ生まれの黒人奴隷）という奴隷の役で、LとRを混同させたスペイン語を話し、アフリカから来たばかりであることは丸分かりという具合だ。

ラファエルは、ハバナ社会で最下層のこのボサルの階級に属していた。電車やトラムに乗ることはできたが、許されていたのは三等車両だけである。

ハバナ滞在中に私は、ここでは誰も道化師シヨコラの名を聞いたことがないのだと知った。この名を口にすると、キューバ人はすぐに同じサン・イシドロ出身の別の人物「キッド・チヨコラテ」を連想する。彼の本名は、エリヒオ・サルディニヤス・モンタルヴォ。1910年生まれで、1931年のボクシング世界チャンピオンだ。エル・カピトリオ前にある大きなスポーツ施設は彼の名を冠している。キューバ国立サーカスの責任者のひとりと会ったときに、私はシヨコラについて話をし、ラファエルが生まれた街に戻ってくることができずにどんなに苦しんでいたかを語った。自分がパリの花形スターになったと故郷の人々が知らないことを、彼は死ぬまで残念がっていた。私たちはその晩、道化師シヨコラが、キューバの人々みんなの記憶のなかに居場所を見つげるためにはどうしたらいいかを、熱く語り合ったのだった。

## 第2章

### シヨコラはビルバオで漂白されそこねた

#### 白人の主人との旅立ちの日

「その人物は、優美なステッキと太い鎖の懐中時計を持ち、灰色のパナマ帽を被っていた。シヨコラは、彼の姿を昨日のことのように目の前に思い浮かべることができぬ」。幼い奴隷時代に関しては曖昧な答えを繰り返すラファエルだったが、運命が動き出した決定的な瞬間について話す段になると、フランシスコに詳細な証言をしている。ハバナから強制的に出発させられてから30年が経っていたが、彼は何も忘れていなかった。カスターニョという新しい主人の名前も、ラファエルを買うために彼が払った18オンスという金額も、はっきりと憶えていた。この額は、当時のハバナの公務員の給料4か月分だった。

親愛なる読者よ、コミュニティから唐突に切り離され、外国人に売られ、海に向こうの見知らぬ土地に連れて行かれた、この子供が体験した別離の痛みを想像していただきたい。現在でも、アメリカ合衆国に向かうために、フロリダ海峡を非合法で渡ろうとする若いキューバ人たちは、街区の霊媒師のところにお守りをもらいに行くという。出発の少し前、悪い運命から守ってくれるようにと、宗教的な母親であるマドリーナがラファエルにレスグアルド（魔除け）を授ける場面を、私は想像してみ

ラファエル、大西洋を横断し、ヨーロッパまでの3週間の船旅



る。小さなオブジェが呪術的な力を宿すようにカサ・デ・サント（P・37）でラファエルのために開かれたささやかな儀式には、街区の人々がみな参加したに違いない。最後に、サンテロ（P・37）が、魔除けの役割をラファエルにしっかりと教えた。

「これらは戦士だよ。お前のために道を開き、人生の闘いに勝たせてくれるだろう。決して手離してはいけないよ。このブリキの小さな箱のなかに入れて、住む家の扉の裏に置きなさい。家の出入りを見張ってくれるだろう。この真珠の首飾りも大切に持っておきなさい。悪い力を追い払

ってくるからね。もし悪い運命がお前に近づいているとい  
うお告げを受けたら、首飾りを壊して霊たちの怒りをそこに  
閉じ込めてしまいなさい」

ラファエルの旅立ちの正確な日付は分からなかったが、1875年から1880年のあいだのどこかで故郷の島を発ったと考えられる。蒸気船による航海技術の進歩は目覚ましかったとはいえ、当時、大洋の横断は依然として危険に満ちていた。汽船は帆船よりも速く、正確で、確実ではあったが、それでもハバナからプエルトリコを経由して、スペイン南西部のカティス、スペイン北部のサンタンデル、あるいはビルバオに到着するには3週間を要した。航海中に事故や遭難に巻き込まれることは、十分に起こり得た。客たちは乗船するとき、鼠屑ひじかにしている日刊紙で読んだ災厄の話が頭をよぎり、少し不安を覚えたろう。例えば、1875年9月に、まだぴかぴかだった蒸気船ヴィル・ド・ビルバオが、

フランス南西部、ブルターニュ沖のイル・ド・モレーヌで沈没した事故は、当時の乗客たちの記憶に新しかっただろう。霧のせいで船長は岩礁に気づかず、船体は衝突により文字通り真つぷたつになったのだ。

別離の辛さが、送別の儀式をどんどん大仰なものにしていった。おおぎょうラファエルも、ハバナ港の河岸からそうした場面を何度も目にしていただろう。出発のずいぶん前から、クレーンが貨物を積むために稼働し始め、続いて、航行中に牛乳や新鮮な肉を乗客に提供するための家畜も船内に運ばれた。荷物の積み込み後に、いくつもの小船が乗客たちを客船に運んでいった。親や友人たちも、長らく別れることになる愛しい者とできるだけ一緒にいたいと、ついていった。もしかしたらこれが最後になるかもしれない。船長の合図があっても、別れの挨拶はやむことはない。嘆き、涙し、抱擁し合い、「神があなたを守ってくれますように」あるいは「早く戻ってきて」と繰り返す。感動的で、人間的な場面だ。こうした愛情の表現が白人に限られていた、という事実を除けばであるが。乗客のなかにいる黒人たちは使用人であり、主人の別離の儀式が終わるのをただ黙って待っていた。彼らにも家族や友人がいた。しかし、彼らは河岸に留まり、鉄の怪物の巨体に飲み込まれていく愛しい者たちに、最後に控えめに手を振るのみだった。

その日、客船へ向かう小舟のなかで、ラファエルはカスターニョ氏の隣にいた。サン・イシドロ地区のソラールで愛しい者たちが静かに涙に暮れていることを、もちろんラファエルは分かっていた。この別離は彼にとって辛いものであり、さらには知らない国に旅立たなければならぬことは彼をとっても不安にさせただろうと、私は思う。

当時の海上交通はイギリスの船会社にほぼ独占されていたが、ヨーロッパのほかの大国も大型船舶を保有するようになっていた。カスターニョ氏のお気に入りには、「A・ロペス郵船会社」だったかも

しれない。1881年に「エスパニョーラ・トランスアトランテカ社」と名前を変えた、カスターニヨの同国人が設立したこの船会社は、公権力の認可を受け、スペイン政府からの補助金があった。「メンデス・ニユヌス」は、会社で一番の豪華船だ。著名な設計士ロベール・ナピエによつて設計され、1000人の乗客と1000トンの貨物を載せることができた。中央煙突と3本マストが誇らしげにそびえ、多くの新聞記事がその豪華さと優美さを褒め讃えた。

私は、船長が最後に汽笛を鳴らし、メンデス・ニユヌスが滑り出す場面を想像する。ゆつくりと、とてもゆつくりと、気づかないほど少しずつ滑らかに、まるで船自体も親しんだ港を離れるのが辛いかのよう。あるいは、棧橋に残る人々に向かつて甲板から手を振る乗客たちに最後の余韻を与えるかのよう。徐々に蒸気船は速度を上げ、ぼやけて境界が見えない広大な青い海原に意を決して乗り出す。モロ要塞もプンタ要塞も、もはや彼方の白い染みだ。甲板の上のラファエルは、新しい主人の隣で、生まれてからずっと生きてきた世界を、全く新しい視点から目に見ていた。もはや彼の路地でもなく、彼の街区でもない。彼の目はいま初めて、街全体を捉えている。それは、青、ピンク、黄色に塗られた外壁、ムーア様式「イスラームの影響を色濃く受けたヨーロッパの建築様式」のテラスや教会の小尖塔が描かれた、一枚の色彩画のように見えた。

岸からほんの数メートル離れただけで、ラファエルはもう以前と同じ人間ではなくなつた。彼はいま、自分の生きた場所を遠くから眺めたことがある類たぐひの人間に仲間入りした。俯瞰ふかんで目にした故郷は、まるで熱帯の太陽のもとできらきらと輝くひとりの人間のようだと、思った。棧橋に残つた人々は、自分の路地、自分のソラールを離れることはないのだと、ラファエルは分かっていた。いつかハバナに戻ることにあつたとしても、もはや以前と同じではいられない。自分が生きてきた世界を遠くから見て、ラファエルは距離を取ることを知つた。彼らと自分のあいだに生じた、このほんのわずか

な境界は、決して消えることはないだろう。

船上無線通信がなかった時代、航行は不確実性に満ちていた。3週間のあいだ外界から遮断された乗客にとって、旅はまるで幕間まくあい、流れゆく人生のつかの間の休憩であるかのよう感じられた。同じ客船に乗り合わせるようになった人々は、出身、性別、社会階層がどうであれ、この短い時間、運命共同体となる。船会社は、この混ざり合った状況を非常に警戒し、金持ちと貧乏人の接触は心配の種だった。船上で伝染病が発生すると、船は到着後の一定期間隔離を余儀なくされた。一等船室の金持ちの客たちは、三等の貧しい者たちが原因と考え、シラミや病原菌を移されることを恐れた。また、盗難、暴力、そしてとりわけ暴動を起こされやしないかと、心配した。

危険予防のために船会社は、切符の値段に応じた厳密な住み分けを実施していた。二等・三等の客は、船の前方の船員たちの傍に入れられた。その多くが、文無しで国に帰る移民たちか、契約終わりの兵士たちだった。彼らは、倉庫区画に詰め込まれ、吊るされたハンモック、あるいは鉄棒の上に設置された簡易寝台に寝かされた。

規則には、二等・三等の客は、メインマストよりも後方に進む権利がないと明記されていた。そこから先の客船後方部は上級客の専用区域で、一等の豪華ごうしゃな船室があった。使用人は、客室近くの下層部のスペースに寝泊まりし、主人に呼ばればすぐさま駆けつけた。

ラファエルにとって新しい生活の始まりだった。いまや彼は、ハバナにいた頃に夢見ていた家内使用人だった。裕福な客を集めるために、船会社は、快適さと贅沢ぜいたくさを提供していた。客室に水道が設置されたので、客室係が船尾まで走って手摺から洗面器を空からにする必要はなくなった。サロンは、金箔、板ガラス、寄木細工などで豪華に装飾され、シャンデリアが金の鎖で天井に吊るされていた。毎晩、コンサートや舞踏会が、こうしたサロンで催された。日中、太陽が出ているあいだは、女性たち

は彫刻が施された階段から甲板に上り、互いの装いを賞賛しあっていた。ハバナの上流地区の社交界がこの小さな生活圏に再現され、人々は暇をつぶし、不安を払拭たつしきすることに努めていた。

1日の仕事が終わる藁わら布団ふとんに寝に戻ると、ラファエルはきまってる、拘束され強制されて大西洋を逆向きに横断した祖先に思いを馳はせた。それは彼の両親だったか、あるいは祖父父母だったのか。彼らがいいたから、そして懸命に働いたから、白人の主人たちはいま、自分の富をあのように大いばりで誇示していられるのではないか？

### カスターニヨというラファエルの主人の出自

調査を進めるために、このカスターニヨ氏の情報を集める必要があった。でないとならば、ラファエルがスペインで過ごした数年間が空白のままになってしまふ。『フティットとシヨコラの回想録』にはいくつかのヒントがあった。フランシスコ・ノアンによれば、カスターニヨは「スペインとカリブ海域のあいだの貿易を営むポルトガル商人で、ビルバオに商館を置いていた」。さらに、この貿易商は、ビルバオから20キロのカストロソプエルタという村に農場を所有する母親のところで働かせるために、ラファエルを買った、ともノアンは書いていた。

私は、これは幸先がよさそうだと感じた。当時のスペインでは、植民者が「小さな黒ん坊」を持ち帰り、近親者にプレゼントすることは珍しくなかつたからだ。カスターニヨという名の裕福なポルトガル商人はそう多くはないだろうし、公文書館に何らかの足跡が残っているに違いない。

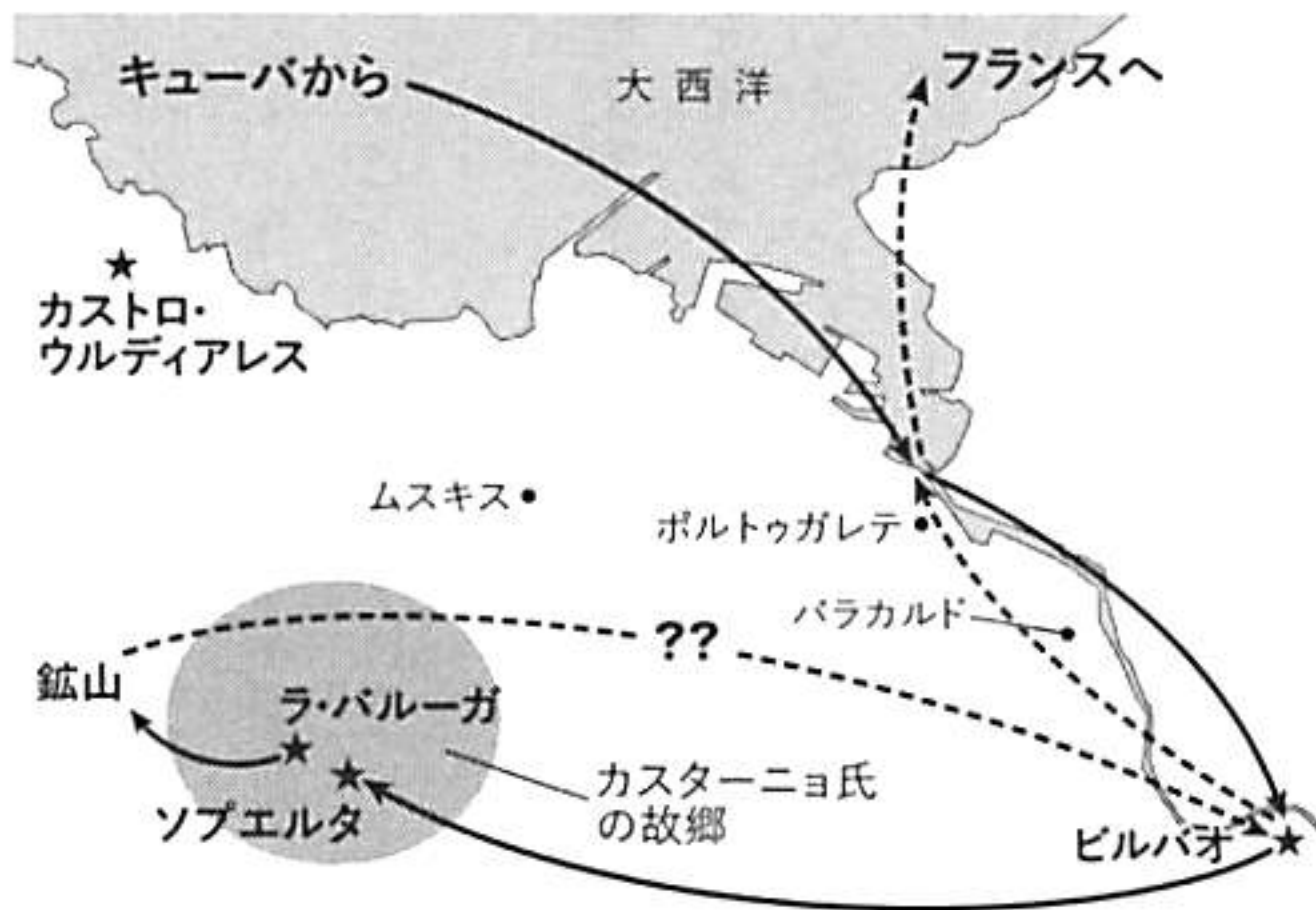
ポルトガル最古の名門国立大学であるコインブラ大学で開かれた講演会に招待された折に、私は同僚たちに質問してみた。冷水を浴びせ掛けられたようだった！ カスターニヨとはポルトガルではなくスペインの名字であり、カストロソプエルタという村は存在しなかつた。私は認めざるをえなかつ

た。フランシスコ・ノアンが名前を勝手に作っていたのだ。改めて、この社交好きで教養のない作家に怒りを覚えた。なんとという無知、なんとという好奇心の欠如であることか！ 数か月後、私は自分の研究について、バルセロナのある研究者に話す機会があった。彼女のおかげで、カストロソプエルタCastrosopuertaという言葉が、バスク地方にある互いに近いふたつの町、カストロ・ウルディアレスCastrosopuertaとソプエルタSopuertaの名を合わせたものであることを、私は発見した。ラファエルが生涯ずっと舌を巻いてRの発音をしていたことを、私は知っていた。回想録のための聞き取りをしていたとき、フランシスコ・ノアンは、ラファエルの発音SopuertaをSopuertaと聞き違えてしまったのだろう。新しいヒントを得て、キューバで財をなしたスペイン人（より正確にはバスク人）商人の情報を、私は集め始めた。そして、1836年12月15日ソプエルタに生まれたニコラス・デル・カスターニヨ・イ・カペテイーヨという人物にぶつかった。刑事コロンボさながらの捜査を重ねていた歴史家にとっては、真に幸福な瞬間だった。歴史は科学ではないと誰が言えるだろう。

キューバへのバスク移民に関する歴史研究をさらに調べていると、ニコラス・デル・カスターニヨ・イ・カペテイーヨが非常に重要な人物であったことが分かった。彼は1850年頃、キューバの中央部南岸にある大きな街シエンフエーゴスに居を構えた。小さな会社に雇われたカスターニヨは、ロウソク製造から始めて事業を徐々に拡大させ、販売や金融にも進出した。ハバナから700キロ南のマンサニーヨ地方でいくつかのサトウキビ・プランテーションも所有していた。

この伝記を書くための文書史料がなかったため、私は他の調査方法をなんとか見つける必要があった。この段階で、新しいテクノロジーが提供してくれる素晴らしい可能性を、私は実感することになった。インターネット上を「サーフィン」していて、私はビルバオのアマチュア歴史家のブログを見つけた。彼は、街の慈善家であったパトリシオ・デル・カスターニヨ・イ・カペテイーヨという

## スペインでのラファエルの足跡



人物についての記事を載せていた。

ソプエルタ生まれのこの人物は、当然ながらニコラス・デル・カスターニヨの家族だろうと思われた。それを確認するために、スペイン・バスク州の北西部にあるビスカヤ県の教会歴史文書館のサイトから、この村の教区簿冊「教区の司祭が、教区民の洗礼、婚姻、埋葬の日付を記載した古記録で、今日の戸籍簿のようなもの」を閲覧した。確かにニコラスとパトリシオ・デル・カスターニヨ・イ・カペテイーヨのふたりは、パブロ・カスターニヨ・アルコとロサウラ・カペテイーヨ・ソビナスの息子だった。ニコラスが10人兄弟の長男で、彼らはみな1836年から1857年のあいだにソプエルタから1キロ半のラ・バルローガの別荘で生まれていた。そこにラファエルが連れて行かれた農場があるに違いない。

### カスターニヨ家の子孫からの手紙

私がこのビルバオの歴史家に連絡を取ると、マドリッドに住むカスターニヨ家の子孫の連絡先を教えてくださいました。私はすぐにその人物にラファエルについての手紙を書き、何か聞いたことはないかと尋ねた。以下が、私が2014年5月4日に受け取った返事である。

「祖母から、ひとりの黒人が使用人（クリアード）として私の家族のところに住んでいたと聞いたことがあります。祖母は、奴隷という言葉はせず、使用人と言っていました

た。彼女によれば、私たちの祖先であるパトリシオ・カスターニヨが、キューバから生まれ故郷のソプエルタにその少年を連れ帰ったとのこと。その村にはパトリシオが建てた屋敷があった。今でも私たちが所有しています。ビスカヤ地方にある、その内陸の村では、少年は黒人ということで、かなり目立っていたようです」

歴史家としての喜びを再び感じた瞬間だった！ 5年にわたって、私はフランシノアンの話の信憑性を確認するための情報を集めてきた。そして、架空のワードであるカストロソプエルタから組み立ててきたシナリオが、ここでぴたりとはまった。カスターニヨ家の子孫が口にした家族の名前は、私が戸籍で見つけたものとひとつひとつ一致した。パトリシオの孫娘であった祖母から伝えられたという黒人のクリアードについての思い出は、証言者がフランシノアンの著作を知らなかっただけに、一層信頼できる。彼は、「黒人使用人」がビルバオから逃げ出して数年後、フランスで花形スターになっていたことを知らなかった。この日私は自分が、実験によって発見の正しさを証明した化学者になったような気がした。私はシナリオの段階から証明の段階に進んだのだった。同時に、この口述史料は、フランシノアンの話の信憑性を高めた。もちろん、十分な解読が必要であるが。

パトリシオ・カスターニヨの子孫は、祖先が港で雇った使用人をすぐにビルバオまで連れてきたとは考えにくいと続けた。ラファエルは初め、ハバナのミラマール地区に家族が所有していた海沿いの美しい邸宅で働いていたのではないかと、この場所は、いままではベトナム大使館になっている。子孫の証言は、ラファエルの話を理解するためにさらに決定的に重要な情報をもたらした。引用しよう。

「私の祖母によれば、パトリシオ・カスターニヨには、レイス、ホセーファ、ドロレスという、非常に古風で典型的なバスク女性であった姉妹がいました。三人は、この使用人が怠け者であまり働かず、さらには家に入れるには十分に清潔でないと感じていたようです。そこで、彼女たちは彼を『消毒する』ことに決め、ふろに入れ、馬を相手にするように硬毛のブラシでゴシゴシと洗ったのです」

そして、こうした扱いから逃げるために、ラファエルは逃亡を決意したと言う。

この告白は、私の心を強く揺さぶった。ラファエルがパリに来てからずっと、観客たちが繰り返す「漂白されそこねたニグロ」というつまらない冗談に耐えなければならなかったことを、私は知っていた。しかし、証言は、差別がここソプエルタでからだを対象とする形ですでに始まっていたことを示している。カスターニヨ姉妹が、馬用のブラシで彼を「洗おう」としたのだ。ラファエルは酷い目に遭わされていた。

フランシノアンの本のなかでは、このエピソードは言及されていない。ラファエルは彼に話したくなかったのだと思う。30年経った後でも、あまりに屈辱的なこの体験を公わらわにすることは、ラファエルにはできなかつた。しかしながら、ノアンも待遇が悪かつたことについては触れている。すなわち、カスターニヨ氏は、「少年を、厩うまやの灰色の雌馬のかたわらで寝泊まりさせ、彼がすっかりした藁のベッドと十分な上掛けを使えるよう心を配った」。

馬小屋で寝るといふ動物のような扱いを受け、ラファエルはキューバでの生活よりもずっと辛い体験をしたのだらうと思う。紛れもなく孤独だつた。夜は「灰色の雌馬」と共に、日中は牛や鶏と過ごし、カスターニヨ夫人の娘たちから雑言ぞうごんや肉体的な暴力を受けた。寒さにも苦しんだらう。今日でも、

暑い国から来たかつての移民たちは、受け入れ国での最初の思い出を尋ねられると、しばしば冬の厳しい寒さが頭に浮かぶようだ。ソプエルタは海洋性気候ではあったが、霜が降りることも珍しくなく、納屋に暖房はなかった。のちに、それこそパリに落ち着いてだいぶ後になってからも、道化師シヨコラのまわりの者たちは、彼が真夏でも毛裏つきコートを着ていることに驚いた。刺すような冬の寒さが、彼の記憶のなかで、癒えない傷のように刻まれていたのかもしれない。

### 野生動物か怪物のように扱われた、バスクでのラフアエル

バスク地方の特殊性のせいで、この地域の農民たちは孤立を深めていた。当時300人が住んでいたソプエルタは、ラス・エンカルタシオネスと呼ばれる小さな地方の中央に位置する。山がちな地形で、ビスカヤ地域圏のなかで最も農業に向かない区域だった。自分の家を持つ農民であつても暮らし向きは非常に貧しく、数頭の牛を飼育しながらトウモロコシを耕作していた。

1833年から1876年まで3次にわたって続いた、スペインの王位継承をめぐるカルリスタ戦争が終結したばかりのバスク地方には、戦禍の跡が風景の至る所にまだ残っていた。人々の心の傷もいまだ癒えておらず、それが一層地方の特殊主義を強めた。

ラス・エンカルタシオネスの地域アイデンティティがますます強くなったのは、住民たちが自分たちへの脅威が増大していると感じていたからである。産業革命がこの地まで届こうとしていた。ソプエルタは、開発ただなかの鉱山地帯の中心にあつた。地元の農民は地表に出た鉄鉱石を数世紀前から発掘していたが、それに大きな資本会社、とりわけイギリス企業が目をつけた。国は大部分の共有地を取り上げ、外国企業に売却した。古い村から少し離れたカストロ・アレン地区に、会社は山を崩した後、次々と労働者向け集合住宅を建設し、商店やカフェも作った。突如として現れたこの新しい街

区に、農民たちは危機感を募らせた。ラス・エンカルタシオネスの鉞山地帯の住民たちが、封建的特権を守ろうとした教会や貴族を中心とするカルリスタ勢力を強く支持したのは、こうした搾取に対する集団的抵抗でもあったのである。

ラファエルは、不幸なことに、外国からの脅威にコミュニティ全体が一致団結して対抗している、その中心に突然連れて来られたのである。それまでバスク地方の農民たちにとって「よそ者（エトランジエ）」とは、隣村や近隣地区から来た人間のことだったのが、いまや、見知らぬ人々が大挙して押し寄せ、自分たちの財産を奪っていく事態となっていた。抗夫の世界とはなんのつながりもなかったが、ラファエルもこの「ごろつき」のひとりだと見なされた。よそ者の最たるものとさえ思われていた。まずは肌の色によって、そして、ハバナのクレオール語を話すので、バスク語を話す農民たちと会話ができず、絶対的よそ者だった。

抗夫としてこの地方に働きに来た者は、村から離れた集合住宅に住んだ。しかし、ラファエルは、農民たちのコミュニティのなかで生活し続けるしかなかった。それゆえ、農民たちにとって身近なよそ者であり、腹いせのためにちよつとしたことで罵倒された。フランシノアンの著作には、ラファエルはカスターニヨ姉妹に虐げられていただけでなく、ソプエルタのほかの住民たちからもいじめを受けていたことを連想させる描写がある。明言は避けつつも、ノアンは、ラファエルが村の若者たちと敵対的な関係にあったことを示唆している。あるときには、カスターニヨ夫人から預かっていた1週間分の買い物代である14フランをすべて村の若者たちに盗られてしまった。このソプエルタで、ラファエルは「エル・ルビオ（ブロンド）」というあだ名をつけられ、スペインにいるあいだじゅう、そう呼ばれることになった。

ハバナでは、ラファエルはただの奴隷だった。バスクの村で、人生で初めて、「よそ者」であると

はどういうことかを知った。ハバナでは、彼はコミュニテイの一員であり、集団的アイデンティテイの壁を張り巡らせることで、外からの攻撃から身を守ることができた。「彼ら白人主人」に対して、「われわれ黒人奴隷」と言うことができたわけである。しかし、ここソプエルタでは、そのようなアイデンティテイ上のつながりは存在しなかった。ラファエルは、奴隷制の軛くわに苦しみ続けただけでなく、周囲の農民たちに日常的に野生動物か怪物のように扱われた。

シヨコラがこうした攻撃を受けた場所を目にしておきたいと、私はソプエルタを訪れた。唯一残っているラファエルの痕跡は、まさしく彼の主人を顕彰する痕跡だった。パトリシオ・デル・カスターニヨは、村の篤志家とくしであった。上水道の設置や、家族全員が洗礼を受けたラ・バルーガの村のサン・ペドロ教会の塔の建設に資金を提供していた。パトリシオは非常に敬虔な人物だったようで、邸宅内の礼拝堂で私的なミサを執り行う許可を教皇から与えられていた。彼の娘は、村の教会に一番大きな祭壇を建立させた。この寄付を記念するプレートには、次のように刻まれている。

「ドン・パトリシオ・デル・カスターニヨ・イ・カペテイーヨ、大十字功労勲章シュヴァリエ、シエンフエーゴスのスペイン・コロニー名誉総裁、1915年11月5日ソプエルタ。教皇から聖なる秘跡と使徒としての祝福を受けた」

その晩、私は、ラファエルとの架空のつながりを再び結ぶ必要を感じた。そして、日記を開いた。

2014年8月13日火曜日

私は、君が若い頃に過ごした場所をこの目で確かめたくて、ビルバオを訪れた。最初の手紙からももう5年が過ぎてしまった。君が私に答えてくれないから、私は君の人生の物語を語ることはできないでいる。私たちの演劇作品では、君が演じた道化師シヨコラの姿を通して、ベル・エポ

ック期のフランス人が黒人をどのように見ていたかを聴衆に見せてきた。2012年には同じテーマで小さな本も出版した。そのときは、もうこれ以上の調査はできないだろうと感じていた。歴史家という職業上、真実をごまかすことはできないからね。証拠なしには、何も断言しない。それが学生たちに私たちが教える基本的な約束事だ。研究者として大学で職を得たいのならば、同僚たちに自分が職業上の作法をきちんとして心得ていることを示さなければならぬ。すなわち、史料の所在を把握し、問いを立て、文書の読解・批判・対照・解釈ができなければならぬ。

私はいつも敬意をもって、この歴史研究の作法を守ってきた。とりわけそれはわれわれに信頼を置いてくれている人々のためである。しかし、公文書館になんの史料も残されていないがために君の真の人生が闇に包まれたままなのを見て、このままでは、君が記憶に拒否されている現状を、私自身も容認することになってしまっているのではないかと感じ始めた。この罫かから逃れるために、鏡の向こう側に行くことを私はついに決意した。文章を書きイメージを作る人々からは距離を置き、書かれたものを受けとる側、そして応答する術すべを持たないがために、しばしばそれに苦しめられる人々の側に行くことにした。ラファエル、いま、私は君のいた場所に立とうとしている。そして、「エル・ルビオ」あるいは「シヨコラ」と呼ばれたときに、君がどのように反応したのか、新聞や挿絵付き雑誌に掲載された（事実とは違う）自分のイメージを見つけたときにどのような感じたのかを、理解したい。

私がこの道を進んでいくうえで、作家たちの助けが必要だった。彼らだけが、想像力を動員して、舞台上の登場人物たちの親密な空間に入り込み、困難にぶつかったときに彼らがどのように感じたかを描写することができる。だからといって、私は歴史を文学の類として再定義するつもりは毛頭ない。確かにこの20年間、「歴史は物語に過ぎない」とする批判に歴史学はさらされて

きたが、結局のところ私たち歴史家が専門的営みを行ううえで大きな変化をもたらしものではなかった。ここでの私の目的は、もっと実用的なものだ。私は、君が仕事のうえで成長するためどのような努力をしてきたのか、本当のところは分からない。だが、ほかの例やモデルを取り上げて、目的に合わせてそれらを君の場合に当てはめていくことを試みた。歴史と文学の架け橋ができないかと、多くの小説を手にとった。君と同じ経験をした者たちの自伝を読み漁った。記憶の残し方を分析した書物からも大いに刺激を受けた。だからこそ、私は君が生きた場所を直接訪れようと考えたのだ。

### からだを馬用ブラシでこすられたラファエルは、カスターニヨ家から逃げ出した

ソプエルタの村でラファエルが過ごしたという痕跡は、カスターニヨ家の人々の記憶のなかにしか残っていない。証言者の祖母は1899年の生まれで、それは「ニグロの漂白」エピソードから15年ほど後である。それでも彼女がこの話をしばしば耳にすることになったのは、家族全員が罪の意識を感じていたからだ。ただ自分たちと違うからという理由だけで、身を守る術を持たない者に苦しみを与えていたことは、その責任を負うべき者たちの記憶のなかに、傷跡として残っていた。だから、こうして130年を経て、パトリシオ・カスターニヨの玄孫（孫の孫）が私にその話をする事ができたのだ。

ニグロを洗濯して、漂白する。当時、多くのヨーロッパ人がそのような幻想を抱いていた。ソプエルタの農民たちは、黒人を見たことがなかった。彼らにとって、黒い色とは、不潔さや野蛮さに結び付けられるものだった。馬体用ブラシでニグロの肌を洗うことは、文明化のための重要な使命だった。すなわち、黒から白へ、陰いんから陽へ、汚物から清潔さへと。当時の教養層で広く読まれていた人種差

別的理論を、カスターニヨ姉妹は目にしたことがなかったろうと思う。それでも、彼女たちは、自発的に人種差別の最たるものと言える行為——人間のからだと動物のそれとを一緒にし、拷問に近い虐待——を行ったのである。無防備なからだへの直接的攻撃という彼女たちの行いは、ラファエルの人間としてのアイデンティティそのものを傷つけた。

自分が生きている場所で支配的集団からの絶え間ない嘲りあざわらひと冗談の対象となってしまうとき、人はその尊厳を守るための拠り所が必要となる。農場に着いてすぐに、マドリーナから渡された金属の小箱をラファエルが納屋の入り口近くに埋めて、レスグアルド（魔除け）の助けを求める場面を私は想像する。残念なことに、魔除けはこうした類の侮辱から彼を守るようには想定されていなかった。

ラファエルは、拷問者に対抗するための言語的手段を持たなかった。そうであれば、からだを使つて逆らうしかない。多くの社会心理学の研究が、恵まれない階層出身の若者たちが暴力をふるう主な原因は、謂いれの無い烙印くわくいんを押されていることにあり、それから逃れようと物理的な暴力に頼ろうとすると、分析している。こうした行動は、たいてい14歳から15歳の思春期初期に始まる。まさにこの年齢のときに、ラファエルはソプエルタの地獄から逃げ出すことを決意し、その後はしばらく非行を繰り返すことになる。カスターニヨ夫人から預かった14フランを「賭けに負けて」村の若者たちに盗られてしまったとき、ラファエルは最初の家出を試みたと、フランシノアンは記している。そのときは憲兵に捕まったが、また逃げ出した。夫人が彼を学校に送ることを決めたからだ。裏を返せば、それ以前は彼女はラファエルを教育する必要を感じていなかったということだ。

フランシノアンは、ラファエルが農場を逃げ出したのは、カスターニヨ夫人のお金を勝手に賭けに使ってしまったことに罪の意識を感じていたからだと書いている。しかし、ドン・パトリシオの子孫は、若い黒人の「漂白」エピソードと逃亡には、直接のつながりがあると述べた。

「この漂白の経験は、あなたの言うラファエルには気に入らなかったようで、彼は逃亡してフランスに向かったそうです。私の家族からの通報を受けて、当局はビルバオの港に、『カスターニヨ家所有の黒人使用人を捜索中』という内容の『捜索と捕獲の通告』を出しました」

ヨーロッパの地に足を踏み入れた時点で奴隷は自由人になると、当時の国際法は定めていた。しかし、少し調べを進めると、この規則はスペインでは大いに議論的であったことが分かった。なぜなら、キューバのスペイン人植民者たちは、奴隷制を危ぶませるすべての措置に対して極めて否定的だったからである。彼らは、ヨーロッパに戻って来る際には、一緒に連れてくる黒人を「クリアード（使用人）」としてパスポートに記載し、この法をやり過ごしており、実際のところこうした黒人の多くは奴隷だった。「クリアード」。この言葉は、私の証言者であるドン・パトリシオの子孫がラファエルに対して用いたものである！

カスターニヨ兄弟は、奴隷制廃止に反対する植民者階層に属していた。長兄のニコラスは、奴隷に対する最も抑圧的な法律を要求していたシエンフェーゴス地主協会の地元支部を統率していた。だとすると、パトリシオ・カスターニヨが、ラファエルを自分の所有物と考えていたとしても不思議ではない。当局を通してラファエルに対する捜索と捕獲の通告を発したことの説明もつく。植民地のキューバでシマロン「P. 32「逃亡奴隷」」に対して適用されていた手続きを、スペイン当局がビルバオでも継承していたことに私は驚いた。そこで、マドリードの内務省文書館に連絡を取り、私の調査の目的について説明した。2014年11月3日に返事を受け取ったが、ラファエル逃亡事件の痕跡は何も見つからなかったとのことだった。

史料がないために、若いラファエルがいかに試練を乗り越えたのかを理解するには、文学という最後の手段を使うしかなかった。アメリカの黒人作家リチャード・ライトは、『ブラック・ボーイ』と

いう著作のなかで、自身が若い頃に体験した人種差別の実態について語っている。確かに、コンテクストは違う。『ブラック・ボーイ』は、依然として暴力を伴う人種隔離が実施されていた1920年代アメリカ南部が舞台だ。しかし、ラファエルの状況と共通点もある。リチャードは孤児院に預けられたとき、ラファエルと同年齢だった。母親と引き離されたことに耐えられず、自分の殻に閉じこもり、明日こそはここを出ると毎朝誓っていた。そして、ある日行動に移した。

「扉を開け、走って外に出た。日は落ちていた。立ち止まり、ためらった。戻るべきだろうか？ いいや。僕の後ろにあるのは、空腹と恐怖だ。再び走り出した。へ中略）どこに行こうとしているのか？ 自分にも分からなかった。進めば進むほど、怖くなった。自分は何かに向かっているのではなく、逃げているのだと、混乱した頭で思った」

鉱山で働きながら、ラファエルは人生で初めて「自由」を味わった

1911年の『ジル・ブラス』紙掲載の記事（P. 20）のなかで、ビルバオで雑役をしているときにトニー・グライスと知り合ったと、ラファエルは述べている。若者はカスターニヨ家から逃げたあと、まず鉱山で働き、続いてビルバオに出てチャンスを手に入れた。このシナリオは説得力がある。カスターニヨ夫人の農場があるラ・バルーガは、カストロ・アレン鉱山地区からほんの数キロのところだったからだ。会社は当時来る者は拒まずで雇用していた。

まだ幼いラファエルだったが、簡単に雇ってもらえたのだろう。露天の採掘場では、仕事自体は、同時代にフランス・ロレーヌ地方で拡大した地下鉱山よりも、危険は少なかったかもしれない。しかし、強制労働に近い状況だった。20から30メートル四方の採掘場が、クアドリーヤと呼ばれる少人数のグループごとに振り分けられ、出来高で賃金が払われた。抗夫たちは、爆薬を使って、山腹から岩

盤を崩していった。それから、ペオン・デ・ミナスと呼ばれた単純労働者が、つるはしで石の塊を砕き、鉱石、土砂、岩石を背負ってトロッコまで運ぶ。トロッコは、木製レールの上を走って谷底に降りていく。

農場から鉱山へと逃亡したラファエルは、おそらくいままでで肉体的に一番きつい仕事をする事になった。しかし、人生で初めて、彼は自由を味わっていた。年齢<sup>ま</sup>15にして、初めての給料を受け取った。額は多くなかったが、それは紛れもなく彼のものだった。好きなように使っていたのだ。ラファエルはまた、匿名の空間で生活できることもうれしかっただろう。唯一の黒人だったから、ふざけて「エル・ルビオ」と呼ばれ続けはした。しかし、この冗談は、ソプエルタにいたときほど彼を傷つかなかった。労働者文化では、「侮辱」を受けた者は、手厳しく相手にやり返すことが許されていた。フランシノアンによれば、抗夫たちはラファエルのことを、腕相撲のチャンピオンで、気前がよく、いつでも笑わせてくれる「陽気な仲間」だと見ていたようだ。この記述から、ラファエルがすでに喜劇の才能を開花させつつあり、そうすることで自分の尊厳を守ることができると理解していたことが窺える。

ビルバオ地方のすべての鉱山はもう閉鎖されたので、こうした世界はいまは失われている。ただ丘の斜面に、産業採掘の跡が残るのみである。森を歩いていると、いまでは雑草に厚く覆われた、いくつかの打ち捨てられた労働者住宅の壁があった。あるいは、トロッコ駅の遺物や、鉱石で一杯になった車両が通っていたトンネルの一部も見かけた。

ラファエルのまわりにいたのは、風来坊と呼ばれる類の男たちだった。炭坑労働者の世界は非常に不安定で、みな、この地獄から抜けることだけを考えていた。そんななかで、ラファエルも、ビルバオに行ったほうが簡単に仕事を得られると思ったのかもしれない。彼は徒歩で逃げ出し、少ない荷物

を腕に抱いて野外で眠ったと、フランシノアンは語る。山中を行くほうが警察からの追跡を逃れられると判断したのでだろう。

今日ビルバオを訪れる大勢の観光客たちは、みなグッゲンハイム美術館を訪れる。彼らの多くが、15キロにわたって棧橋沿いに打ち捨てられた物置や建屋には目もくれない。しかし、それらこそがわれわれに、かつてビルバオがバスク大工業地帯の中心であったことを思い出させてくれる。1880年代初頭、都市の人口は3万人ほどだった。ハバナに比べると、多くはない。ラファエルは、この街のいかめしい雰囲気は好きになれなかったに違いない。彫刻が施された梁のある立派な家々が並ぶ街並みには、しかし、どこか悲しげな雰囲気が漂っていた。数年前に街を破壊した内戦の痛手から、まだ完全に立ち直ってはいなかった。

街は、ネルビオン川沿い10キロにわたって発展した。河口にある小さな区画ポルトウガレテには、大きな船舶がいくつも横づけされている。ラファエルは、カスターニヨ氏がポルトウガレテに商館を持っていたとフランシノアンに話したのでだろう。そのため彼は、カスターニヨがポルトガル人だと結論づけたのだ！

港湾活動はハバナと同じくらい盛んだったが、ハバナほどバラエティに富み、色彩鮮やかで、騒々しくはなかった。貿易の根幹は製鉄業だった。船舶が港に運び込んだ石炭で、採掘場ではたまった水を汲み上げる蒸気機関のポンプがひっきりなしに稼働した。傾斜面とトロツコを用いて何トンもの鉱石が貨物船倉庫内に吐き出され、イギリス、フランス、あるいはアメリカへと向かった。鉄は、ネルビオン川を赤く染め、訪れた人々を驚かせた。埠頭は果てしなく長く、樽や荷袋、荷車であふれていた。大勢の労働者が、船舶の積み荷の出し入れを繰り返していた。ラファエルは、大勢の女性が力仕事に従事していることに驚いただろう。彼女たちは、石炭や鉱石を大きな籠に入れて運び、牛が引く



19世紀後半のポルトウガレテ

荷車のなかに移していた。あるいは、大きな麦わら帽をかぶり、お腹のまわりに太い縄を巻き、ネルビオン川沿いに荷舟を引っ張っていた。白人女性がみな、プリンセスか売春婦のどちらかというわけではないことを、この日ラファエルは知った。

埠頭周辺には多くの建築現場があり、喧騒は一層大きくなった。港湾当局は、地域全体の急速な産業振興に対応しようと、躍起になっていた。海運交通量の増加に伴い、ネルビオン川の堆砂除去は大仕事となった。800メートルの新しい埠頭「鉄埠頭」は、まさに建設中だ。入り江に入ってくる船を誘導するための、潮の高さを正確に測ることができる巨大な計測器は設置されたばかりだった。かの優美な吊り橋プエンテ・ビスカヤの建設も始まった。橋は1893年に開通し、いまではユネスコの世界遺産に登録されている。海運交通の負担を軽減するため、ビルバオ・ポルトウガレテ間の鉄道敷設工事も開始された。

これらの大規模工事を進めるために、建設会社は常に新しい労働力を雇い入れていた。ラファエルもまた、建設作業員あるいは埠頭の港湾労働者の職を簡単に見つけたのだろう。フランソワアンを信用するならば、そうした日々のなかで、ラファエルは、ベルトランという名の若いフランス人に出会い、コンビを組もうと誘われた。彼のあだ名はトランペット。ふたりで駅やホテルの前で旅行者を捕まえ、鞆を運び、街を案内しようというわけだ。

この新米コンビのターゲットはビジネス客だけではなく、ネルビオン川左岸のポルトウガレテや右岸のラス・アレナスといった海沿いの小地区には、海水浴場として人が集まってきた。鉄道

の発達により観光業の進展も目覚ましく、大勢のイギリス人やフランス人がバスクの海岸に滞在するようになった。

一緒に働くことを承知させるために、トランペットは、黒人のボーイはヨーロッパではとても評価されるとつけ加えた。埠頭での荷箱積み降ろしに飽きていたラファエルは、新しいキャリアを始めることを決意した。しかし、それは長くは続かなかった！ある日、彼はひとりの旅行者と顔を突き合わせた。忘れもしないかつての主人だった。「カスターニヨ氏は恩知らずにも仕事を放りだしたハバナの少年のことはとうに諦めており、彼がいま何をしているかも知ってはいったが、捜し出そうとは思っていないかった。しかし、ラファエルのほうは、この急な出来事になんとも居心地が悪かった。顔を合わせていられず、すぐに踵を返した」。

「恩知らずにも仕事を放りだした」！フランシノアンの目には、納屋で寝かせる白人主人のもとから逃げ出すことが、「恩知らず」と映るようだ。ラファエルは、カスターニヨ家が彼に対して実際追跡をかけており、捕まるのが怖かったと説明したのだろうに、ノアンは、良い白人主人像を粉飾するために臆面もなく全く反対のことを書いている。このような書き方で、自由人となるために逃亡生活を余儀なくされた黒人少年に、若い読者たちは感情移入できるだろうか？

### ビルバオで出会い、新しい主人となったトニー・グライスという人物

カスターニヨ家と完全に縁を切って、シヨコラは解放への第一歩を踏み出した。しかし、いつ追っ手に捕まり無理やりカスターニヨ夫人の農場に戻されるかも知からない。それを恐れて、このときラファエルはこの地方を出ることを考え始めた。彼の守護天使はちよつとした救いの手を差し伸べようと、トニー・グライスという男をラファエルの行く先に据えた。ラファエルのパリ到着からわずか3

年後に出版された『ムツシユール・クラウン！』のなかで、著者エドゥアール・ド・ペロデューは、グライスはある日、ビルバオの路地をふらふらしているラファエルを見つけたと記している。

「短い会話を交わした後、彼を連れて帰った。そのときシヨコラという名前も与えた。以降、彼はずっとそう呼ばれることになった」

ふたりの出会いは、ビルバオ駅でラファエルが旅行者の鞆持ちをしていた頃の話だと考えられる。妻と子供たちと共に街に着いたトニー・グライスは、手伝いを見つけないならなかった。そこで、ひとりの若い黒人を滞在中雇うことにしたのだろう。

「トニー・グライス」とは誰なのか？ エドゥアール・ド・ペロデューによれば、この「晴れ晴れとした丸い顔のクラウン」は、アシスタントのアントニオ、一匹の小さな猿と一頭のブタと一緒にステージに立っていた。19世紀初頭以来、イギリス人クラウンがヨーロッパのサーカス界を席卷せきりんしていた。彼らは、シェイクスピア作品にも出てきた、不器用だがずる賢い農民を模したキャラクターである「ジェスター（宮廷道化師）」の後継者である。アメリカでは「ミンストレル」とも呼ばれる黒人に扮した白人役者の芸の影響も強く受けつつ、独自の芸を発展させてきた。

トニー・グライスは主にスペインのマドリドやバルセロナで演じていたが、夏祭りの時期にはスペインの他の大きな町にも招かれた。ある新聞記事が、彼が1886年8月の終わりにビルバオにいたことを伝えている。このときにラファエルと出会ったと考えていいだろう。

当時、クラウンはまさに座長だった。彼の命令のもとで動く「オーギュスト」と呼ばれるアシスタントがひとりおり、さらに「カスカドゥール」という数人の付き人がいた。カスカドゥールは、クラウンから平手打ちを受けたり、クラウンの道具を持つのが主な役割だった。オーギュストは通常、クラウンが後継者と認めた若いアーティストだった。クラウンはオーギュストに、秘技やコツを伝授す

る。代わりに、歳をとり演じられなくなったときに、オーギュストが自分の世話をしてくれることを期待した。トニー・グライスがラファエルと出会ったとき、すでに後継者は決まっていた。アントニオ・ハルケという名のリスボンの衣装屋の息子で、「プティ・トニー」あるいは「トニート」と呼ばれていた。

もう20年以上も演じている十八番『コリーダ（闘牛）のパロディ』で、トニー・グライスはスペインでは大変な人気者だった。ビルバオに招待されたのは、1886年8月22日から24日の年次大祭の期間だった。コリーダや競牛もプログラムされており、ふたりの有名な闘牛士フラスクエロとラガルティホも参加した。夜になると町じゅうがエリシオス広場に詰めかけた。慣習通り、角先をゴム製の球で飾られた子牛が広場に放たれ、素人が危険なく闘牛に興じることができた。人々がこのイベントに沸いた直後に、サーカスが開幕した。舞台に上がったトニー・グライスが、観客が待ちに待っていたコリーダのパロディを披露した。

フランシノアンによれば、ラファエルは、グライスのアシスタント兼家族の使用人として雇われていた。さらに、ブタのチャーリーが逃げ出したら、隠れ場所からステージに連れ戻す役目もあったが、この子ブタはいつも力の限り抵抗してきた。コリーダのパロディでは、トニー・グライスが闘牛士に

扮し、偽の牛と対峙した。牛のなかにはアシスタントふたりが入って、前進したり後ずさったりした。アントニオが動きを指示し、後ろ足を担当するラファエルがそれに従った。

トニー・グライスはまた、アメリカのミンストレルのパロディも演目に入れ、ラファエルも含めた団員全員が



ラファエルの  
主人のクラウン、  
トニー・グレイスを描いた  
当時のポスター

黒人に扮した。ラファエルの役割は、ただパンチを受けるだけで、お返しは禁じられていた。

ラファエルは、ステージ上のアーティストたちの技を観察して学ぶことはできなかつた。牛の後ろ足を操る仕事が終わったらすぐにグライス夫人のもとに行き、使用人として働かなければならなかつたからだ。トニー・グライスは、ラファエルがサーカスの世界に入るのを手助けするのではなく、ただ奴隷のような条件下に置いた。シマロン（逃亡奴隷）はいま一度白人の主人から逃げ出すことを決意した。ラファエルがカスカドゥール兼使用人の立場に長くは我慢できなかつたことを示す一文が『ムツシユー・クラウン！』のなかにある。ビルバオでラファエルが置かれた状況について、エドゥール・ド・ペロデューユは次のように書いている。

「シヨコラはしばしば反抗的だった。殴られることに対してではない。彼の主人の名誉のためにつけ加えるが、殴打はステージ上の演出のために必要なときにのみ限られていた。しかし、新しい生活やそこでのお決まりの仕事に反発を示した。一度ならず、トニー・グライスは彼を追い出さざるを得なかつた。追い出されたラファエルはどうしたか？ 駅で重労働をしていた。この哀れなやつが陥ったみじめで痛ましい境遇に同情して、トニー・グライスは彼をもう一度雇ってやった」

ペロデューユはフランノアンと似たような屁理屈へっきょくを並べている。彼の頭を占めていたのは、白人主人に立派な役を与えることだけだった。だからこそグライスは、ラファエルがあまりに規則を守らないので追い出「さざるを得ず」、しかし「同情」を覚え、元に戻した、と書いたのだ。しかし、「反抗的」という言葉を使い、ペロデューユは、無意識のうちに別の仮定を示唆してしまっている。すなわち、それはラファエルが自分の意志でグライス家を去り、鞆持ちという〈仕事〉に戻ったということだ。彼はカスターニヨ家で味わった奴隷の立場にもう戻りたくなかつたのだ。もしかしたらラファ

エルが「トランペット」に出会ったのは実はトニー・グライスのもとから逃げ出したこのときだったのかもしれない。彼のせいで手持ちの金を全部使ってしまった。鉾山には戻りたくないが、「浮浪者」として生きることに恐怖を感じた。彼はシマロンだったから、状況は単なる流浪人では済まされないのだった。主人に連れ戻された奴隷を待ち受ける運命が、彼の記憶には深く刻まれていた。血だらけになるまで馬体用ブラシでけずって黒人を白くしようとする体罰はもうごめんだった。連れ戻しにきたトニー・グライスが、自分のところに戻るのなら彼をパリに連れて行くつもりだと話したとき、ラファエルはためらう気持ちを抑え込んだ。スペインから完全に離れられるという選択肢が、ついにラファエルにサーカスの世界に飛び込む決意をさせたのだった。

### 第3章

ラファエルはいかにして「シヨコラ」になったか

ラファエル、主人に連れられて名門サーカス座、ヌーヴォー・シルクを訪れる

1886年9月26日、トニー・グライスは、スペイン・マドリードのプリセ座でシーズン最後のステージを飾った。この日以降、スペインの新聞にグライスの名前は出てこない。そして、同年10月2日土曜日に、グライスがパリのサーカス座、ヌーヴォー・シルクの新シーズン初日の公演に参加していたことを示す新聞のコラムを、私はフランス国立図書館の電子サイトGallica（ガリカ）上で見つけた。つまり、ラファエルは、おそらくこの日にパリでアーティストとしてのキャリアを開始したということだ。

ヌーヴォー・シルクは、パリ1区のサントノレ通り251番地に位置する。8か月前に華々しくオープンしたばかりだった。その折に新聞に掲載された写真やデッサンが、繊細な彫刻が施された堂々としたファサードや、二本のギリシャ風石柱が設えられた玄関ホールしつらの威厳ある様子を伝えてくれる。このサーカスが1927年に閉じてしまったことは知っていたが、それでも、その場所に行けば、半世紀のあいだパリの上流社会——当時の言葉で言えば、ハイ・ライフ——を魅了した建物の名残なごりが何か残っているのではないかと期待した。



サントノレ通り251番地のヌーヴォー・シルク外壁(左側)

かつてのサーカスは、いまでは高級ホテル「マンドリン・オリエンタル・パリ」に場所を譲っていた。もはや、小さなキューバの奴隷だったラファエルが道化師シヨコラとなり、20年ものあいだパリじゅうから拍手喝采かっさいされていたことを思い出させるものは何もなかった。

私の主人公にまつわる記憶は、彼が生きていた場所からすっかり消されてしまっていた。ラファエルがパリに着いたときに何を感じたのかを想像するためには、私は手元にある資料を丹念に紐解いていく必要があった。歴史書は助けにならなかつた。サーカスとは、大道芸人(サルティンバンコ)の世界である。将来を思い悩まず、過去のことにと頓着せずに、その瞬間を生きるアーティストたちが集まる。彼らの文化は、ジェスチャーと喋りしゃべりでできていて、そこには映像や文字は出てこない。歴史家は

は、つかの間を生きる人々はあまり好きではない、というよりも、知らない。なぜなら、そうした人々は史料を残さないからだ。アカデミアの世界では、おびただしい数の博士論文が演劇の歴史を扱っているが、サーカスやミュージック・ホールが取り上げられることは稀だ。サーカス芸術が完全なる忘却を免れているのは、アマチュア研究者、収集家、あるいはかつてのアーティストたちのおかげだ。1930年代、画家のポール・ヘイノンがサーカスに魅了され、パリじゅうの目ぼしいサーカス団それぞれの記録を作り、数百人の曲馬師きまうし、曲芸師、クラウンの目録を作成した。彼は、これらを元に辞書を作ることをご構想していたが、それは実現しなかつた。

パリ市文書館に保存されているヘイノンの残した仕事は、私に



パリ随一のサーカス座  
といわれたヌーヴォー・シルクの  
支配人、ジョゼフ・オレール

とつて非常に貴重なものだった。手で描かれた1891年時点のヌーヴォー・シルクの図面や、多数のプログラムを発見した。そこには、1886年から1926年にわたつてこの栄光の場で演じたアーティストたちの正確な情報も付されていた。当時の雑誌や書物も参考にしつつ、私はヘイノンの史料を読み込み、ラファエルがパリに到着したときのシナリオを書いた。

1886年9月30日木曜日のことだ。時刻は午後2時になろうとしていた。平服を着たクラウンが数名、ヌーヴォー・シルクの正門前で待っていた。彼らは予定より早めに着いていた。なぜなら舞台監督であるレオポル・ロワイヤルがトニー・グライスに、興行主は時間にうるさいことを伝えていたからだ。2時ちょうどに、男が脇の扉から現れ、合図をした。50絡みの男で、黒檀こくたんのようなつやのある髪を美しくカールさせ、鼻の下にかの小説『三銃士』のダルタニャン風の立派な髭をたくわえていた。彼は、トニー・グライスの手を握った。ふたりの男は、前年シルク・デイベール「冬のサーカス」という意味で、文字通り1852年の興行開始以来、現在も冬限定の上演を行っている」で一緒に働いていたため、すでに顔見知りだった。グライスは一座の他の者たちを紹介するように手で示した。しかし、ロワイヤルは彼らに挨拶する手間は取らなかつた。興行主のオレール氏を待たせるわけにはいかないからだ。ロワイヤルが前を行き、トニー・グライスとアントニオが続き、一番後ろをラファエルが歩いた。廊下から小さな階段を上がり、4人は興行主の部屋に着いた。

「オレールさん、かの有名なトニー・グライスを紹介します。こちらはオーギュストのアントニ



1893年に描かれたフォリ・ベルジェールのポスター(左)。  
パリ10区にあるポルト＝サン＝マルタン劇場(右)

オです」

と、レオポル・ロワイヤルが会話の口火を切った。

「プリーズ・トゥ・ミーチュール、ミスター・グライス。ウエルカム・トゥ・パリス、ウエルカム・トゥ・ザ・ヌーヴォー・シルク」

オレール氏は手を握りながら、グライスはに挨拶した。そして、英語の台詞の言い訳をするようにつけ加えた。

「私は1870年に普仏戦争が始まったときは、ロンドンにいたのですよ」

グライスは、ジョゼフ・オレールがスペイン出身であることを知っていた。お返しするように、彼は作家セルバンテスの言葉で答えた。

「ブエノス・デ・ディアス、セニョール・オレール。  
グライシアス・ポル・アコ……」

しかし、ヌーヴォー・シルクの経営者は挨拶をさえぎり、人差し指をラファエルのほうに向けた。

「それで、あそここの彼。あなたの使用人ですか、それとも  
団員なのですか」

「両方です！」

と、グライスは答えた。

「あなたはもしかして猛獣を扱えるのですか？」

と、オレールは興奮したようにラファエルの目を真っ直ぐ見つめて尋ねた。

「10年前、私はパリ最初のカフェ・コンセール『フォリ・オレール』を作りました。そこで一番人気だったナンバーは何だと思えます？ 実は、黒人の猛獣使いだったのですよ」

「オレール氏は、パリでの黒人猛獣使いのブームを作られたのですよ」

と、ロワイヤルは、笑いながら続けた。

「最初のはデルモニコという名前でした。彼は、それ以前フォリ・ベルジェール（パリのナイトシーンを代表する伝説的なミュージック・ホール）に登場していましたが、でも、すぐに消えましてね。新聞は彼はライオンに喰われたと書き立てたものですよ。そのあと、オレール氏が彼を『生き返らせた』のです」

「その通り。あれは、1876年の終わり頃だったね。覚えてますよ。デルモニコのおかげで、1か月間満員御礼でした」

「ですから、みんなが自分の黒人猛獣使いを欲しがり始めたのです。ポルト・サン・マルタン劇場にさえいましたからね」

「マカオという名前でしたね。ご婦人たちが彼に夢中になっていましたよ」

「あなたも猛獣使いになってみませんか、ムッシュー……」

ラファエルは彼らが交わす会話をひと言も理解できなかつた。全員の視線が自分に向いているのを見て、困ったように主人のほうを向いて、代わりに答えてくれることを期待した。

「残念なのですが、オレールさん。私のニグロはそのような才能はないと思います。私は道具を持ってくれる者が必要、妻は使用人を欲しがってました。それで、彼がびったりだったというわけです」

「私はニグロに目がないんですよ。どうしてかお分かりですか？」

オレールが尋ねた。グライスは首を横に振った。

「私がパリに住み始めた頃、子供たちが私のことを『モリコ（黒ん坊）』と呼びましてね」

この小話は、みんなを笑わせた。だから、ラファエルも合わせて笑った。その様子に気をよくして、オレールは彼らに施設を見学するよう提案した。

「案内係についていってください。まずは、ロワイヤル氏の王国である厩舎（うまや）からどうぞ」

ヌーヴォー・シルクは、サントノレ通り、カンボン通り、モン・タポール通り、カステイグリオーヌ通りに囲まれた広大な四方形の敷地にあった。そして、その半分が厩舎として使われており、20ほどの馬房（ばぼう）（馬1頭が入る長屋風の馬小屋）が二列に並んでいた。ラファエルはこの藁と馬糞の強烈な臭いにはっとしたと、私は想像する。それは、納屋で寝起きさせられ苦痛に満ちていた、カスターニョ夫人の農場での数年間を否応なく思い出させた。

オレールは機嫌よく自分の話をし続けた。見学のあいだじゅう、自分の生い立ちから商売のことまで事細かに語り、つまりは自分が経営の天才であることを示したいのだった。親愛なる読者よ、私が簡潔に彼の話をまとめよう。すべてを聞いていたら退屈してしまうだろうから。

## ヌーヴォー・シルクの帝王、オレールの素性

この男は、第二帝政（1852年～1870年）以降のパリでよく見かけるようになった、危険を冒してでも儲けようとする類の人物だった。スペインで紡毛織物商人の息子として生まれたが、銀行家や鉄鋼王に対抗するほどの財力はなかった。しかし、わずかな投資でも、誕生したばかりの娯楽産

業では大きな儲けが出ることに、若いうちに気がついた。パリジャンが賭けや競馬が大好きなのを見て、現在では場外勝馬投票と呼ばれるパリ・ミュチュエル方式「投票券の総売り上げをプールし、興行主はそこから一定割合を差し引き、残りの金額を勝馬投票券に配分する方法」を編み出した。しかし、この新方式はパリに大勢いたブックメーカーたちの強い抗議を招き、1876年、彼はイタリアン大通り28番地の営業所を閉鎖せざるを得なくなった。その建物を今度はカフェ・コンセールに変えたが、その経営も失敗に終わった。

パリの西方にあるマルリ・ル・ロワの種馬牧場並びにメゾン・ラフィットとサン・ジェルマン・ダシエールの競馬場の所有者であったオレールは、富裕な馬主たちと親しくしており、そのつき合いのなかで、〈上流〉の観客向けのサーカスを作ること考えついた。サーカスの世界は非常に閉鎖的で、いくつかの曲馬師の一族に牛耳<sup>ぎやうじ</sup>られていた。シルク・デイベールとシルク・デテ「シャンゼリゼ通りに1841年にできたサーカス。夏のサーカスという意味で、シルク・デイベールとは逆に夏のあいだだけ営業した」の経営者がフランコーニ兄弟で、モンマルトルの丘の下のフェルナンド座を率いていたのがバエル家という一族だった。ウツク一族のイポリット・ウツクはアルマ橋曲馬場に絶大な影響力を持ち、ランシー家のテオドール・ランシーはフランスの地方都市にサーカス小屋を建て、彼の一座が巡業できるようにした。

しかしオレールは、これら昔ながらの一族は、ショー・ビジネス界に訪れようとしていた大変化に対応できないだろうと踏んだ。ジュール・フェリー「第三共和政期に首相を2度務めた政治家」の改革により、政治状況が興行にとって大いに有利な状況になっていた。検閲は実質的になくなった。フランス人の生活水準は飛躍的に上がり、鉄道が発達して大勢の観光客がパリを訪れるようになった。そして、世界じゅうの注目を集める一大イベントがまもなく開催されようとしていた。1889年のパ

リ万国博覧会である。ジョゼフ・オレールは、ついに自分の出番が来たと感じていた。

サントノレ通り251番地の大きな建物が売りに出されたとき、オレールは飛びついた。ここは、フランコーニ兄弟が1807年にパリ最初のサーカスであるオランピック座を作ったまさにその場所だった。ジョゼフ・オレールにとって、この地で興行するということは、すなわち揺るぎない正統性を手にすることでもあった。

「私たちは、劇場がいくつも並ぶ大通りに近いんですよ。だから、大きな集客が望めるわけですよ」

と、オレールは、小さな階段を指さしながらつけ加えた。

「あそこが、あなた方の楽屋ですよ。明日ロワイヤルが案内します。右手にあるのが団員用応接室です。いわばヌーヴォー・シルクの参謀本部ですね。幕間まくあいや終幕後に後援者の方々とお会いするのもここですよ。ハイ・ライフの紳士方は、一座の者と話すのが好きなのです。彼らを失望させないようにしてくださいね。奥が、改装中のダンスホールです。ヌーヴォー・シルクは、もうすぐ専用のバレエ団も持ちますよ」

彼は腕時計を見た。

「おやおや、もう3時ですね。そろそろ行かねば。でも、最後に立見席に行ってみましょう」  
一団は急いで階段を上った。

「ソリニャック、電気をつけてくれないか」

すぐに、部屋は光の海に包まれた。アーク灯が建物の上層階を明るく照らし、円形の立見席の上に張り出した豪華なたかぶ敷席を露わにした。数珠つなぎの光が、立見席の金色に塗られたアーチ部分をぐるりと巡り、きらきらと際立たせている。そして、白熱電球のシャンデリアが八つ、舞

台を煌々と照らした。おびただしい数の色つき電球が淡い黄色の壁と相まって、曲馬芸を描いたドロローネのフレスコやマグニディアスのステンドグラスといった観客席の装飾を効果的に輝かせていた。

一堂は文字通り、あまりの驚きで固まっていた。当時、電気照明がある建物はまだ珍しかった。金色に輝く観客席はサーカス小屋とは似ても似つかず、まるで瀟洒なお屋敷しょうしやのようだった。ラファエルも仲間負けず劣らず、驚き、感激していた。非現実の世界に迷い込んだように感じ、自分の居場所ではない気がしたのではないか。自分はここでは、背景の染み、全体を台無しにしてしまう無粋な存在なのではないか。こんな金ぴかのサーカスで何をすればいいのだろうか？ 馬でさえも自分がお尻を拭くのを嫌がるのではないだろうか！

「素晴らしいシャンデリアですね」

と、トニー・グライスが叫んだ。

「装飾は、正教の教会に着想を得てるのですよ」

と、誇らしげにオレールは答えた。

「オペラ・ガルニエ〔通称『オペラ座〕。パリにある有名な歌劇場』かと思いました」

「私たちはオペラ座にいるのですよ、親愛なるグライスさん。サーカスのオペラ座！ あそこに見える玄関広間の大階段は、他ならぬガルニエ〔オペラ座を設計した建築家〕の作です」

「どのくらいの観客が入るのですか」

「1500、いや3000まで入るでしょうね。とはいえ、私が目指しているのは、クオリティであって、数ではありませんよ。ここは、世界一大きなサーカスではないですが、最も洗練された場所です。明日、ロワイヤルがあなた方を棧敷席に案内しますよ。青い縁取りのついた古色を

帯びた金色のパール織物、大きな柔らかいソファ、それに赤い絨毯<sup>じゅうたん</sup>。まさに、社交界にふさわしい場所ですよ。そして、ご婦人方の美しさも一層際立つでしょうね」

少し前から、トニー・グライスは舞台のほうをじっと見つめていた。

「あの舞台は妙ですね。砂がないではないですか！」

「その通りですよ、親愛なるグライスさん。砂ではなく、厚いカーペットが敷いてあります。前列の紳士方の目がほこりでかすむなんてことがあってはならないですからね」

「それに、このほうが馬の脚にもいいんですよ」

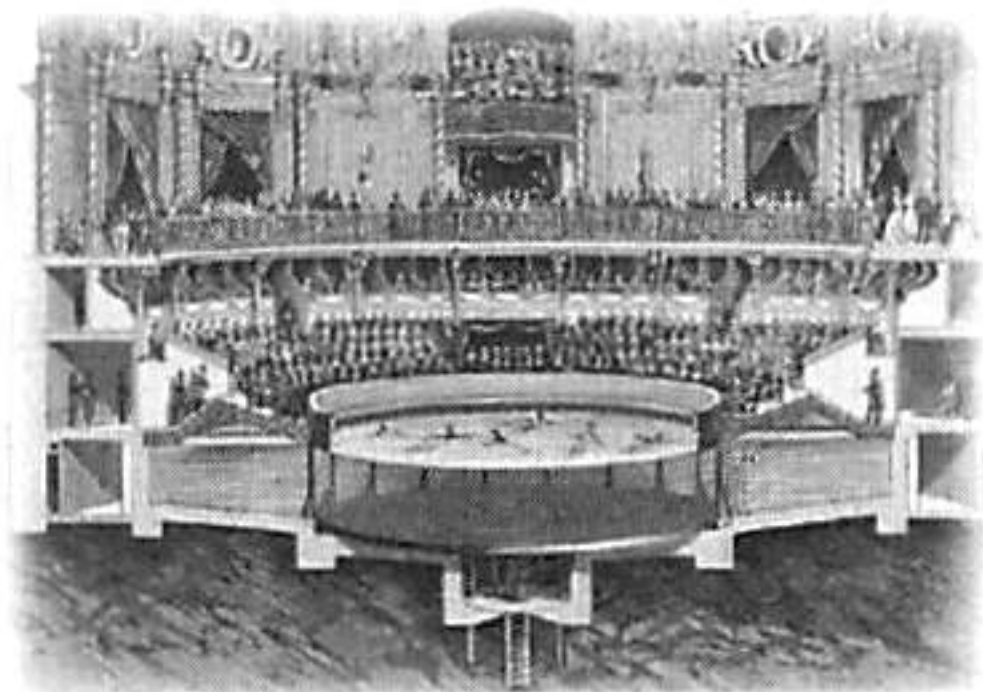
と、ロワイヤルが茶目っ気を交えてつけ加えた。

「どうして砂を使わないのか、すぐにお分かりになるでしょう。さあ、今だよ、ソリニヤック！」

10人ほどの男たちが舞台上上がり、カーペットを畳み、舞台裏に運んだ。技術者がハンドルを動かすと、床が少しずつ下がりはじめ、深い水槽が姿を現した。格子状の板の間を水が勢いよく流れ始めた。それを見てクラウンの一团は再び驚愕した。

「信じられない！ 話には聞いていたのですよ。でも、これは、本当に驚きですよ」  
と、グライスが叫んだ。

「あなた方が目にしているのは、世界でひとつの、プールに早変わりするステージですよ。ここまでののに私の技術者たちがどれほどの技術を駆使したのかは、あえて言いませんよ。エッフェル塔を造るよりも難しいのですからね。ですから、世界じゅうの専門家たちが装置の見学に来るのです。2週間後にも、エコール・サントラル「フランスの工学・技術系エリートを養成するための国立高等教育機関」の学生たちが来ます」



プールに早変わりする、当時の最新技術の手によるヌーヴォー・シルクの舞台

「地下に80メートルも掘ったのです」  
ロワイヤルがつけ加えた。

「水は、電気ポンプの力で表面まで上がってきます」

「さあ、気分を落ち着かせるために、一杯いかがですか」と、オレールはうれしそうに声を上げた。

「立見席の横に、アメリカン・バーを設しつらえたんです」

一同はバーのテーブルを囲み、ロワイヤルが全員分のビールジョッキを運んできた。オレールが相変わらず会話を独占していた。彼はトニー・グライスに向かって、なぜ彼を雇ったのか、そしていかに前任のビリー・ヘイデンには失望したかを語った。オレールは、

この有名なイギリス人クラウンに1886年2月のヌーヴォー・シルク除幕式の演目を頼んだのだった。しかし、フランスの日刊紙『ル・フィガロ』の評価は厳しかった。曰いく、「クラウンは非常に物足りなかった」。

観客はステージがプールに変わる瞬間に熱狂していたので、オレールはプログラムの第三部を水上パントマイムにあてることにしていた。10月から始まるヌーヴォー・シルクの新シーズンに、最初の演目『水浴場（ラ・グルヌイエール）』が上演されることになっていた。

『ラ・グルヌイエール』の後は、セヴィリアの春祭り（フェリア・ド・セヴィーユ）をモチーフにした大スペクタクルを作りたいと思っ  
てます」と、オレールは続けた。

「スペインでは、あなたのコリーダのパロディは大評判だったようですね。頼もしい限りです。」

最初は月に1500フランから始めましょう。評判が良かったら、倍にしますよ。そして、正規契約を結んで、第一クラウンの地位を保証しますよ」

2014年9月16日火曜日

ラファエル、私はついに君の伝記を本格的に書き始めた。アカデミックなスタイルはやめた。そうじゃないほうが、読者が君に感情移入できるからね。君が犠牲となっている記憶の不正と闘うためには、それが一番いいやり方だと思っている。フランスを作ってきた偉人たちのギャラリーに君の場所を見つけることが、私の願いだ。18世紀の教養小説からインスピレーションを得て、君が私たちフランス人の世界を徐々に発見していく過程を、物語ることにした。そして、それは一歩引いてみないと気づかない私たち自身の様々な姿をも浮き彫りにしてくれるはずだ。

しかし、私はまだ君の沈黙という問題を解決できていない。君の人生に関する信用に足る情報はとても少なく、壺のかけらや硬貨、墓の残骸からシナリオを作り上げる先史学者のように、頭を働かせなければならぬ。そう、シナリオ。作家の用語であり同時に知識人のボキャブラリーでもある、この言葉を私は気に入ってる。両者の違いはひとつだけだ。作家のシナリオはフィクションだが、歴史家のシナリオは、手にしているデータから構築されたものでなければならぬ。両者の間に架け橋を作る際に、劇作品の執筆で培った<sup>つちか</sup>ちよつとした能力が役に立った。つまり、この本のなかに、台詞劇を挟み込むことにしたんだ。登場人物は全員実在している。君が人生のなかで出会った人々だ。描写されている場所と状況も事実だ。彼らの会話は、それぞれの人物が残した本や記事に基づいている。ただ演出だけがフィクションだ。

歴史学の博士論文の口頭試問の席で博士号取得候補者がこうした形で議論を展開したら、審査

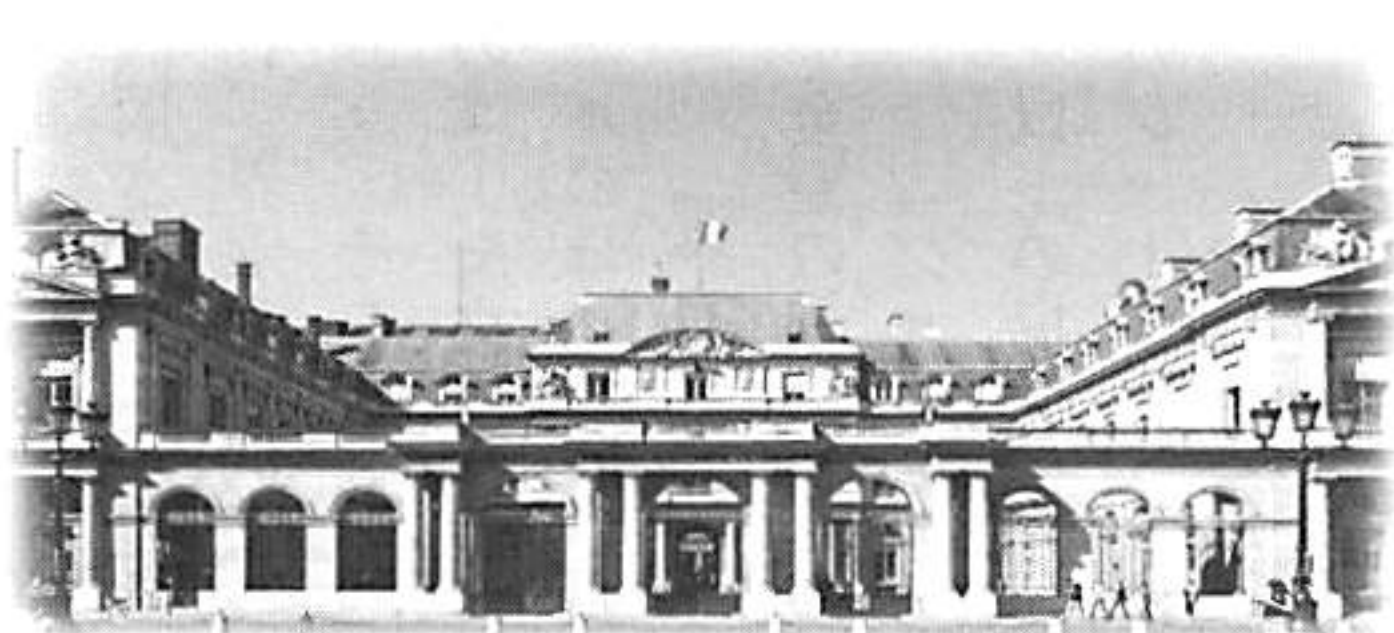
員は認めないだろうことはもちろん分かっている。しかし、私はこのやり方が、歴史的眞実をフイクションと区別する赤い線を越えているとは考えない。哲学的命題を会話形式で展開したからといって、誰もプラトンが書いたのは「小説」だとは非難してない。

### つかの間のパリ散策で目にしたもの

ラファエルはパリに着いてすぐにチュイルリー公園を散歩したと、フランソワアンは書いている。おそらくジョゼフ・オレールとの会談後に、トニー・グライスはラファエルに自由時間を与えたのではないか。なぜなら翌日からは再び使用人とカスカドウールの二足のわらじの生活が始まるからだ。ラファエルは、つかの間の自由な時間を存分に楽しんだ。

ハバナでは、パリを訪れた白人主人たちはみなこの都をべた褒めしていた。そして今、カスターニヨ氏に18オンスで買われた「黒ん坊」が、「正真正銘」ルーブル宮の巨大な外壁が続くりヴオリ通りを歩いている。

これまでの研究のなかで、私はたくさんの移民の回想録を読んできた。彼らの多くが、都市空間があまりに美しすぎて、最初は居心地が悪かったと告白している。ラファエルも、初めてこの洗練された界隈をぶらぶらしたときには、同じように落ち着かなく感じたのではないかと思う。通り過ぎるひとつひとつのファサード、商業施設、邸宅が、ラファエルにはまるで無縁の、固有の歴史を有していた。ルーブル宮は、フィリップ・オーギュスト「1180年に即位し、40年以上在位したカペー朝の王」によって当時より700年も前に建てられた。初期の城塞は、その後フランス王たちのための宮殿に改修され、いまでは世界一大きな美術館になっている。すでに多くの観光客が訪れていたが、ラファエルは泥棒に間違えられたらたまらないと思って入ろうとはしなかったに違いない。



左から、カフェ・ド・ラ・レジヤンス(当時)、パレ・ロワイヤル(現在)、  
コメディ・フランセーズ(内部。当時)

さらに別の堂々とした建物がラファエルの目を引いた。1628年にリシュリュー枢機卿が建てたパレ・ロワイヤルだ。サントノレ通りを西にとると、ルイ14世が1680年に建てたコメディ・フランセーズが右手に見えた。この有名な「モリエールの家」は、古典劇の愛好者たちには「ル・フランセ」とも呼ばれた。それから、サントノレ通り161番地のカフェ・ド・ラ・レジヤンスの前を通り過ぎた。パリで最も古いカフェのひとつだ。ヴォルテール、デイドロ、ルソー、ベンジャミン・フランクリンらがここで落ち合い、啓蒙哲学と人権について語り尽くした。

このような華々しい建築物は、彼自身の歴史とは縁もゆかりもないものだ。ラファエルは思った。だが、そんなことはないのだ！ 黒人貿易に積極的に関与し、ラファエルの祖先たちをアメリカに送り出すことになる貿易会社の設立をリシュリューが決定した場所は、パレ・ロワイヤルではなかったか？ あるいは、奴隷制廃止の正当性についての議論が練られたのは、カフェ・ド・ラ・レジヤンスではなかったか？ ラファエルが通り過ぎたばかりの場所は、彼と全く無縁というわけではない。歴史の舞台だった。しかし、もちろんラファエルはそんなことは知らなかった。

7月29日通りを左に曲がり、リヴォリ通りを横断し、彼はチュイルリー公園に着いた。カルーゼルの

中庭からコンコルド広場へと続く広い散歩道を歩いていると、芝居小屋や小さなマリオネット劇場が設置された大道芸のスペースに気づいた。ギニョル（人形劇）は、毎週木曜日と日曜日の午後に行われ、界限の子供たちを楽しませていた。両親につき添われてきた子供らが舞台前に輪になって座っており、そこにラファエルは近づいた。周囲の楽しそうな様子や憲兵をこっぴどくやつつける登場人物のユーモラスな姿に、ラファエルもまた心から笑った。それもつかの間、突然ギニョルが顔をラファエルのほうに向けた。

「やや！ あそこにショコラがいるぞ。お前は、ショコラだな！」

金髪の子供たちの顔が全員こちらを向いた。そして、一斉に叫び始めた。

「ショコラ！ ショコラ！」

以上の場面は、私の創作ではない。ラファエル自身がフランシノアンに語ったものだが、案の定このジャーナリストは自分勝手に解釈していた。

「ほら、ショコラだ！ これがあだ名の由来だ。界限の子供たちのあいだであっという間に広まり、リヴォリ通りからサントノレ通りでも噂になり、遂にはヌーヴォー・シルクまで届いた」

フランシノアンは、ひとりの大人（マリオネット劇場の主人）が無邪気な子供たちの前で黒人の若者を馬鹿にするという話を、私たちに冗談めかして伝えている。この場面は、さらに20年ほど後にマルセイユで起こった別の話を私に思い出させた。こちらは、被害者側の視点で語られている。若いアルベール・コーエン「ギリシャ生まれのユダヤ系スイス人の作家、政治家」は、行商人の口上を聞いている一団に混ざっていた。

「おい、お前、ユーピン「ユダヤ人への差別的表現」だろう！ 顔みりゃ分かるよ。ブタを食べな

いんだろ、おい』へ中略〕これが、この日10歳の私が何の疑いもなく近づいた行商人から、投げつけられた言葉だ。私は美しいフランス語を聞けるとばかり思っていたのに」

それから、コーエンは、このような象徴的暴力を受けた子供が自分のアイデンティティを守るためにどのような反応したかを、詳細に描写した。「お願いするような眼差し、同情を誘う笑み、臆病そうな笑み、病んでいる笑み、頭の弱い笑み、女々しさとか弱さを前面に出し、相手の怒る気をなくさせるほど穏やかなユダヤ的笑み」を必死で作ろうとしたと、筆者は告白している。最後に、若いアルベールは、共犯的笑みについて次のように表現した。

「ああ、面白い冗談だね、もちろん本気じゃないことは分かってるよ。あなたは笑わせようとしているだけで、本当は僕たちはいい友達だ。自分を守る術を持たない孤独な子供の馬鹿げた希望だ。そうすれば、彼は同情してくれて、いまのはちょっとした冗談さと言ってくれると思って」しかし、彼の相手は容赦なかった。まわりの同意するような笑い声に追い立てられて、子供は逃げ出すしかなかった。

アルベール・コーエンの思い出は、どうしてラファエルが「シヨコラ」という名前をあつさりと受け入れたのかを理解させてくれる。自衛の手段を持たぬ者は、主人が彼に向ける眼差しに自分自身を合わせて、その同情を誘う以外にやりようがないのだ。しかし、フランソワアンが語る場面は、アルベール・コーエンにトラウマをもたらした出来事ほどは暴力的でなかったと言えるだろう。当時、ユダヤ人は反セム主義の根深い憎しみを向けられていたが、黒人はまだ脅威と見なされておらず、どちらかと言えば、見下すような笑いの対象となっていた。

ラファエルに「シヨコラ」というあだ名をつけたのは、トニー・グライスと、後にラフェエルとコンビを組むことになるジョージ・フテイトの「功績」だと考えられていた。実際には、パリジャン

全員、いやフランス人全員が、名づけ親だと誇ってもいいかもしれない。なぜならフランス本土に住むすべての黒人が、当時、「シヨコラ」あるいは「バンブーラ」と呼ばれていたからだ。「シヨコラ」は肌の色の違いから来たもので、「バンブーラ」は、アフリカの踊りに由来し、それはヨーロッパ文化の洗練と対極にある、原始的なものと考えられていた。

### 黒人偏見の長い歴史

これらの偏見には長い歴史がある。ラファエルはこの日、突然に、自分が目にしている壮麗な装飾の裏側を知った。パレ・ロワイヤルからリシュリュー卿が推進した植民地政策は、アンティル諸島やレユニオン島、ギアナにおけるアフリカ人奴隷制に頼ったプランテーション経済へとつながった。「ネグル（ニグロ）」という言葉は18世紀にフランス語のなかに定着し、同時にヨーロッパ人は、コーヒー、チョコレート、砂糖（サトウキビ）を味わい楽しむようになった。裕福な植民者は黒人奴隷を連れて頻繁に本土に戻り、ときには親戚に可愛らしい「小さな黒ん坊（ネグリオン）」を贈り物にした。

この習慣は奴隷制廃止（1848年）後には廃<sup>すた</sup>れ、アンティル諸島やレユニオン島からの移住の流れは減少した。ラファエルがパリに着いた頃は、アフリカ征服はまだ始まったばかりで、パリのアフリカ出身者の人数はとても少なかった。この希少さが、黒人世界が想起させるものに対する相反するいくつかの反応を招いた。貴族階級にとって、黒人使用人を所持することは、革命以前の旧体制（アンシャン・レジーム）を後継する社会階層に属していることの証と見なされ、自分たちの価値を高めた。逆に、庶民のあいだでは、黒人はよそ者の最たるものという認識を持たれた。彼らに向けられた好奇と驚きの目は、半世紀前のアルジェリア征服の際にパリに招かれたアラブ人に対するものと変わった。

っていないかった。1840年にあるジャーナリストが次のように書いている。

「集団が彼らに向かってどっと押し寄せ、無言の好奇心を向けた。そして、彼らが自分たちとは違う時代、違う種類の人間なのではないかと訝しんだ」

19世紀末のパリは、コスモポリタンな都として広く知られていた。田舎や地方都市からやって来たフランス人にとっては、首都は確かに本物の「バベルの塔」のように思えただろう。しかし、このコスモポリタニズムは、実際にはヨーロッパを超えるものではなかった。ほかの大陸からやってくる旅行者はほんの少数で、彼らは道を歩けば振り向かれたり、指さされたりした。「ニグロ」という言葉は、黒人にのみ向けられていたわけではない。アラブ人、当時のフランス植民地ポンディシェリのインド人やニューカレドニアの先住民カナツクに対しても使われた。

当時の人々は現在の私たちのような映像であふれた世界に生きていたわけではないから、なおさら黒人のことを奇妙な存在だと感じたのだろう。テレビや映画が存在しないのはもちろん、新聞紙面に写真はほとんど使われておらず、色刷りの挿絵ですら稀だった。黒人世界のイメージの少なさは、それだけ幻想を掻き立て、商売人は宣伝目的に使用した。ラファエルがパリに着いたとき、パリで一番有名な「ニグロ」は、サンドニ大通りの時計宝飾店がショー・ウィンドウの上に彫刻した、お腹の中心に見事な振り子時計を埋め込んだマネキンであった。

はるか彼方で生まれた人間に対してパリジャンが向けた熱狂に、ショー・ビジネスの興行主たちは新たな可能性を見出した。1880年初頭から、パリの動物園は頻繁に展示会を開催し、人を集めていた。「ニグロ」は、移動式サーカスや祭りの芝居小屋にも登場し、「奇形の見世物」と同等に扱われた。「奇形の見世物」とは、身体的特性から、不健全な好奇心を掻き立てていた、「大男」「小人」「豹女」「腕無し男」などのことである。

これらの薄暗い現実には、小さなパリジャンたちの笑い声と共に、強くラファエルの印象に残った。この日、彼は、初めてのフランス語「ネグル（ニグロ）」と「シヨコラ」のふたつを学んだ。ひよつとして彼は、人権の国では、肌の色による偏見はもうないだろうと期待していたのかもしれない。全くそんなことはない、ラファエルは知った。フランス人の子供たちは、スペイン人の子供たちとそっくり同じやり方で、彼に接した。

この瞬間にラファエルが感じていたことをさらに理解するため、似たような体験をした作家たちの自伝的作品を私は読みこんだ。

「パリの街を歩いていて、辺りを見回す。白人ばかりだ。店員も白人だ。どこにもニグロはいない。確かにここは白人の国だ。人々は慌ただしく、走り回っている。ここでは、視線がすべてを語っている。私の姿は人々を驚かせた。文字通り本当に驚愕していた。誰もが、神様はいったいどんなつもりで色を間違えて、私にタールを塗りたくったのだろうかと言いたげだった。とりわけ彼らを興奮させたのは、厚い唇のあいだに見える白い歯と、炭のような顔だ」

コートジボワールの小説家で政治家、ベルナル・ダデイエの自伝『パリのニグロ』は1950年代に出版されたもので、ラファエルがヌーヴォー・シルクに来たときから三四半世紀も後のことだ。このあいだに、フランス人は、第一次世界大戦時にフランス軍に動員されたアフリカ出身者から成るセネガル狙撃兵たちを目にし、ジョセフィン・ベイカーとルイ・アームストロングに熱狂した。数人の黒人議員も国会に選出されていた。それでもダデイエが感じた疎外感を、ラファエルはもつとずつと強烈に感じていたと想像できる。現地の言葉を話せないラファエルの場合、周囲とのコミュニケーションはさらに少なかった。白人世界にいる黒人というだけでなく、フランス人のなかの外国人だった。

## 貴族たちの見事なパフォーマンスで人気を誇ったモリエ・サーカス

パリの人々との最初の接触は、ラファエルにとって十分にトラウマとなる体験だった。しかし、それだけでは終わらなかった。翌朝、さらなる試練が彼を待っていた。ヌーヴォー・シルクの観客たちだ。ラファエルはどのように迎えられたのか？ 観客たちもまた彼を指さし、馬鹿にしたのか？

この問いに答えるために、新たな視角からの調査を開始した。まずは、首都のサーカスの常連客だった貴族階級に関する史料に当たったが、すぐに、ある名前が目を引いた。エルネスト・モリエである。このフランス北西部サルト県出身の貴族は、熱狂的な馬の愛好家で、パツシーのベヌヴィル6番地の邸宅の敷地内に乗馬学校まで作っていた。そこで彼は、自身の調教技術を磨き、乗馬の名手を夢見る若者たちに高等馬術を教えていた。馬術、フェンシング、器械体操などをたしなんだ貴族の若者たちが、彼のまわりに集まった。1880年以降、このセミプロともいえる一団は、毎年友人たちを集めて、盛大なお披露目会を開催していた。

当時の新聞は、この芸を磨いた貴族たちのパフォーマンスに大興奮だった。エルネスト・モリエ率いるモリエ・サーカスの演目は各紙でこぞって紹介され、詳しく解説された。入り口で招待客は、舞台監督を務めたサント・アルドゴンド伯爵に迎えられる。次に赤いジレ（ベスト）を着た取次係が恭しくプログラムを差し出し、階段席に案内した。舞台が設置されているため、上階の席に行くには梯子を使わなければならなかったが、このちよつとした冒険に上流階級の観客たちは大はしゃぎだった。見事なサテンの靴を履いた小さな足の持ち主たちは、一步一步梯子の段を上がった。その際に、優雅な御婦人方がこのソワレのために纏った、シンプルさを気取った高級布地の裾がさらさらと音を立てる様子は、陽気な雰囲気さらに盛り上げた。



ジェームス・ティソ画  
『パリの女性／サーカス愛好家』(1885)

ング・オベーションした。

親愛なる読者よ、いつかマサチューセッツ州に行くことがあったら、ボストン美術館を訪ねて、フランス人画家ジェームス・ティソの『パリの女性／サーカス愛好家』という絵を鑑賞してほしい。貴族の男性がブランコに座り、背景には階段席に座る夜会服を着た観客たちが描かれている。モリエ・サーカスが有していた社交界の雰囲気的一端を垣間見ることができる。

エルネスト・モリエは、こうした催しのひとつにジョゼフ・オレールを招待したのではないかと私は考える。オレールは跳び上がった喜んだ。まだ単なるスペイン移民だった頃、パリジャンの冷たい視線に彼は苦しんだ。時間を経てもその傷は完全には癒えず、だからこそ、貴族との繋がりを作り、認められたいという強い欲求を満たしたかった。モリエ・サーカスを知って、オレールは、曲馬の演技とカフェ・コンセールの庶民的ナンバーの組み合わせが、貴族たちを魅了することに気づいた。このときに、ヌーヴォー・シルクのアイディアが生まれたのだらう。

貴族たちのサーカスへの熱狂は、フランス社会のなかでこの階層が今後果たしたいと考える新しい役割を如実に示している。彼らは、共和派の政治家たちによって、政治から唐突に切り離されたところだった。しかし、国家権力を手中にしたブルジョワ階級は、土地を所有する古い貴族の家系に相変わらず強い劣等感を抱いていた。貴族の生活様式や価値観が、社交界での規範を形成し続けていた。

### パリ社交界、そして貴族が好むサーカスの主役は馬だった

では、この社交の場で堂々たる主役を張っていたのは誰だったか？ 答えは、馬だ。当時、「人間の最良の友」であった馬は、まだ日常生活でも重要な役を果たしており、馬車は依然として主要な移動手段だった。それゆえ、御者と従者つきの豪華な馬車に乗った貴族たちは、パリの街なかで自分たちの優位性を見せつけることができた。高級地区では、どの邸宅にも厩舎が備え付けられていた。エリザベト・ド・クレルモン＝トネール「アンリ4世に連なる公爵家の出身で、文筆家」が回想録のなかで語るところによれば、彼女の両親は大型馬車専用の馬、ランドー型の中型馬車のための「中くらいの馬」、ジョッキークラブやオペラ座で夜会を過ごした公爵を連れて帰る「夜専用の馬」に加えて、屋根の覆いをたためる無蓋四輪車を引くためのがっしりした小型の馬を所有していた。

貴族階級のアイデンティティという点からも、馬は重要だった。馬はかつての騎士道精神の生きた証言者なのであり、古い帯剣貴族家系の出身者は自分たちこそが騎士道精神の継承者だと自任していた。この戦士の価値観は馬術のなかに受け継がれ、貴族特有の趣味となり、ブローローニュの森を馬で散歩することが紛れもない上流階級の証だった。優れた騎手になるために、子供たちは幼い頃から乗馬を学ぶ。馬術は、「ナショナル・アイデンティティ」にとっても重要な要素であった。馬術学校では、軍隊文化の影響が色濃い「高等馬術」を教授する。騎手は、馬に乗り手側の規則を守らせ、馬が



「パリーの伊達男」  
といわれた  
ボゾン・ド・サガン

自分の意思で動くことを許さない。これはイギリスの伝統とは異なる。

ルイ・フィリップ治世（1830年～1848年）初頭、  
当時は貴族の趣味という意味でしかなかった「スポーツ」  
がドーバー海峡を渡り、パリで流行した。馬を育て、レー  
スに参加し、自分の馬の幸運に賭けることが、社交活動の  
中心として定着したのである。1833年に設立された馬種改良奨励協会が、すぐにロンドンのそれ  
と関係の深い「ジョッキークラブ」という会員制サークルを作った。翌年には、ルイ・フィリップ  
の長男オルレアン公後援のもと、ジョッキークラブ賞という初の競馬大会が開催された。

ラファエルがパリに来た19世紀の半ば頃、首都には72以上のサークルがあった。競馬、曲馬芸、ギ  
ャンブルが行われる機会は増えたが、ヒエラルキーは七月王政期から変わっていない。ジョッキ  
ークラブが相変わらずフランスで最も権威あるサークルだった。会員は古い貴族の家系に占められ  
ていたが、ロチルド（ロスチャイルド）家のような銀行家、ヴァンデルやシュナイダーといった鉄鋼  
王などの新興の実業家たちも一定数存在した。ジョッキークラブは、フランス国内に絞ったクラブ  
ではなかったため、イングランド王、デンマーク王、ベルギー王、ロシアのアレクセイ大公などが名  
誉会員として名を連ねていた。

ハイ・ライフ、あるいはクラブマンと呼ばれたエリート層は、首都の地図上でも、他と一線を画し  
ていた。彼らは、サンジェルマン通り、サントノレ通り、クレベール大通り、あるいはシャンゼリゼ  
大通りに邸宅を構えていた。文化行事のスケジュールを意のままにしていたのも彼らだ。社交界の1  
年は、ハイ・ライフが保養地から戻る10月に始まり、5～6月にパリ近郊のオートウイユ競馬場で開

催されるパリ大障害、シャンティ競馬場でのジョッキークラブ賞や、パリ市内にあるロンシャン競馬場のグラン・プリ・ド・パリといった競馬大会で幕を閉じる。

美しい衣装、洗練された身だしなみ、豪勢な馬車、そして邸宅によって、貴族たちは、自分たちが下々の者とは一線を画し、上位の「人種」に属するのだということを外に向かって印象づけようとしていた。このデモクラシーに対抗する時代遅れの闘いを最も体現していたのが、タレイランの遠縁にあたるボゾン・ド・サガンであろう。この完璧なクラブマンはパリで最もエレガントな男だと評されていた。サン・ドミニク通りの邸宅には1200人まで招待できた。誰もが彼のファツションを真似したが、オートウイユでの競馬やサイクリングの流行を牽引したのも彼だった。

十分な財産を持っているにもかかわらず、ジョゼフ・オレールは、「成り上がり」である自分に対する軽蔑の視線を感じていたに違いない。それでも、貴族階級から認められたかったオレールは、サーカスの世界に投資し、エルネスト・モリエを味方につけた。サーカスは、馬が主人公の唯一の舞台芸術だという点において、極めて貴族的な娯楽と言えた。オレールはまた、貴族たちが彼のサーカス座を訪れるようになれば、サーカスはカフェ・コンセールよりも流行るのではないかと期待した。

### ヌーヴォー・シルクの舞台監督、レオポル・ロワイヤルという人物

エルネスト・モリエの支援があつて初めて目論見は成功する。そこで、ジョゼフ・オレールはモリエにヌーヴォー・シルクの馬術部門を仕切ってくれないかと頼んだ。モリエは、友人のレオポル・ロワイヤルを舞台監督として雇うことを条件に、提案を受けた。舞台監督を務めるのはたいてい元曲馬師であり、「ショーの支配者」とも言えた。曲馬師を指揮するだけでなく、サーカス全体の構成にも関わる。オーケストラの指揮者に始まりの合図を送るのも、最初のナンバーの演者を入場させるため

に「バー」を上げる指示をするのも舞台監督だ。時間を管理し、大道具・小道具の配置にも目を配った。つまり、この立場を任せられるのは、サーカスの仕組みを熟知している者でなければならなかった。

レオポル・ロワイヤルはその意味で最良の人選だった。彼は、フランスで最も古いサーカス家系の出身だった。祖父のアンセルムは、第一帝政期「1804年から1815年まで存続した、皇帝ナポレオン1世による軍事独裁政権期」にフランコーニによって創設されたパリ最初の一座で働き、その後、自分の移動式サーカス団、『ロワイヤル兄弟のインペリアル・サーカス』を作った。息子や孫たちがそれを引き継ぎ、曲馬芸を得意としていた。しかし、この一座は1860年代に破産し、レオポルはシルク・デイベール（P. 72 当時はまだナポレオン座という名だった）の舞台監督として雇われていた。

フランスで最も有名な曲馬師を雇うことができ、オレールはますます意気揚々だった。エルネスト・モリエを満足させたし、ハイ・ライフの人々も気に入るだろう。しかし、こうした集客戦略は、このスペイン人興行主の財政能力を超える投資を必要とした。そこで、株式会社を作ることにし、馬主兼育成者の友人たちに協力を求めた。その筆頭には、モンテカルロのカジノとモナコの海水浴クラブの創始者で、不動産開発で巨額の富をえたフランソワ・ブランの息子であるカミーユとエドモンが名を連ねていた。

私は、ラファエルが飛び込むことになった世界の輪郭を徐々につかみ始めていた。ヌーヴォー・シルクの最初の公演に訪れた人々について正確に知るために、パリの新聞に掲載された批評を注意深く読んだ。除幕式は1886年2月15日だった。貴族が好んだ日刊紙『ル・ゴロワ』は、翌日、前日の

晩に棧敷席を埋めた客の全リストを掲載した。王位請求者であるパリ伯の弟シャルトル侯爵ロベール・ドルレアンがいた。王党派の長であるラ・ロシュフーコー・ビザシア公も来ていたし、さらにはトルベツコイ伯爵、ド・プルタレス伯爵夫妻、チュレンヌ子爵、オーストリア大使であるホヨス伯爵夫人も顔を出していた（これ以上は書ききれないが、子孫のかたがたにはご容赦いただきたい）。幾人かの「非貴族」もいた。『ル・ゴロワ』の経営者であるアルチュール・メイエやパリ県知事であるウジェーヌ・プベルである。プベルに関しては、この本の主題からは外れるが、一言加えておきたい。彼は、都市の衛生問題に（そう言えるならば）大ナタを振るったところだった。パリジャンに蓋つきまたの小箱にゴミを入れるよう徹底したのである。この箱は、これ以降プベルと名づけられた。

ジョゼフ・オレールは、この晩、誇らしさで一杯だった。「ゴミ箱」の発明者が棧敷席にいたからではなく、パリじゅうの流行を自由に操っていた魔術師、エレガンスの体現者サガン公その人が来ていたからである。彼が「パリに姿を現せば、現政権が奪っているこの街の輝きと人生の楽しみを、再び見出すことができる」のであり、彼の来場は大変な名誉だった。この上のコメントは『ル・ゴロワ』に載っていたのだが、プベル知事に対するちよつとした皮肉であろう。ともあれ、ジョゼフ・オレールにとっては、輝かしい時間だった。目標は達せられた。ヌーヴォー・シルクは社交界の評判を獲得したのだ。この勝利が一層輝かしかったのは、来場者たちが結果的に首都の社交界の主要サークルの他の会員たちも巻き込んだからである。ジョッキークラブ会長であるラ・ロシュフーコー・ビザシア公は、4つの棧敷席を年間契約した。ロワイヤル通りサークル（ここはジョッキークラブ会員の子弟向けだったので「ロワイヤル・ベベ（赤ん坊）」とも呼ばれていた）を統率していたサガン公は、ふたつの棧敷席を契約した。これに続いて、エクレルール・サークルは4つ、シャンゼリゼ・サークルとヴォルネイ通りサークルはそれぞれ3つの棧敷席を契約した。

最初の弾みがつき、ヌーヴォー・シルクの経営は、年間を通じたパリのハイ・ライフのネットワークの支持をうまく取りつけることができた。契約を結んだこの階層が、サーカスの観客の支柱となった。頻繁に訪れ、影響力もあり、要求も高い、規範と習慣を共有するこれらの常連は、ヌーヴォー・シルクがこれから毎晩彼らを楽しませてくれることを期待した。

最初の夜の成功は、1886年6月6日のチャリティ・イベントでさらに裏づけられ、強固なものとなった。これはエルネスト・モリエが、ウゼス公爵夫人の後援のもと、取り仕切った。フランス中部のモルトマールで生まれたウゼス公爵夫人は、「ヴーヴ・クリコ」の名で知られるクリコ・シヤンパーニユの販売で得た相当な財産を母親から相続し、パリで最も優雅な建造物のひとつと評判のシャンゼリゼ通りの邸宅に住んでいた。30歳のときに寡婦となった。彼女が纏う、ウエストを絞った立ち襟のドレスにちりばめられた立派なダイヤモンドは、社交界でもとりわけ目を惹いた。ウゼス公爵夫人は、王党派の重要人物でもあり、ブーランジェ將軍「第三共和政の転覆を図ったものの失敗に終わった反議会主義的政治家」を財政的に支援していた。

社交欄のジャーナリストたちは、ウゼス公爵夫人がパトロンを務めるチャリティ組織「職業幹旋慈善団体（オスピタリテ・ド・トラヴァイエユ）」が後援した、この「最高に華々しい」夜会にこぞって熱狂した。

「電気の光の下で、ダイヤを身に着けた婦人方の明るく煌びやかな装いに目が眩むほどだった。幹事の赤い服が、紺碧の斜面に咲くケシのように目を刺した。フォブール・サンジェルマンの住人、フランスのユダヤ人コミュニティ、あるいは文学界の選ばれた人々がそこにいた。モリエ閣下とマドモワゼル・ヴィオラによるパ・ド・ドゥ、ラ・ロシュフーコー閣下の宙返り、ウゼス公爵夫人の息子による見事な馬術に、拍手喝采だった」

公演のフィナーレは、あつと言わせるものだった。モリエの一团が、プールに飛び込んだのだ。会場は笑いの渦に包まれ、割れんばかりの拍手が起こった。

以上の人々が、1886年10月初めにラファエルが対峙することになった観客だ。どんなに優れた小説家であつてもここまでの対比は思いつかないに違いない。人間の序列のなかで最下層に分類され、自分でも逃亡奴隸という自覚を持っていたラファエルが、ヨーロッパが世界の覇権を握っていた時代に、かつてフランス、いやヨーロッパそのものを手中にしていた家系の子孫たちの隣に立つことになったのである。

CHOCOLAT,  
La véritable histoire d'un homme sans nom  
by Gérard Noiriel

©2016, Éditions Bayard, France  
Japanese translation rights arranged with  
Éditions Bayard S.A., France  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

## 写真著作権・帰属一覧 (数字は写真が掲載されているページ)

- フランス国立図書館所蔵 (Bibliothèque nationale de France)  
([http://www.bnf.fr/fr/outils/a.bienvenue\\_a\\_la\\_bnf\\_ja.html](http://www.bnf.fr/fr/outils/a.bienvenue_a_la_bnf_ja.html))

16, 22, 64, 67, 71, 72, 73(左), 80, 108, 120, 124, 125,  
134, 150, 151, 166, 201, 219(右), 224, 232, 291, 311, 364, 365,  
371(右), 455, 487, 502(3点), 505, 511, 519, 542, 547, 574

- ウィキペディア (日本版、フランス版) (Wikipedia)

26, 36, 37, 72, 73(右), 83(3点), 90, 92,  
109, 136, 139, 219(左), 227, 228, 312, 313, 382(2点)

- フランス国立美術研究所 (Bibliothèque numérique de l'INHA)

258, 266

- CIRCOPEDIA<sup>※</sup>—The Free Encyclopedia of the International Circus  
(<http://www.circopedia.org/>)

371(左), 414, 576

※ドミニク・ヤンダー (Dominique Jando) によって2007年に創設され、いまなお絶えず進化し、拡大し続けているサーカスの世界を紹介するネット百科事典サイト。サーカスに関する新しい映像、バイオグラフィー、エッセイ、および関係資料を日々サイトに追加し、サーカスの魅力や歴史を世界に広めている。

※著作権に関しては万全を期しておりますが、権利の所在が明らかでないものを使用している場合もございます。もし著作権を所有されている方は、小社編集部までご連絡ください。

シヨコラ  
ジェラルール・ノワリエル・著  
館葉月・訳

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）  
定価：3,200円（本体）＋税  
発売日：2017年1月6日  
ISBN：978-4-7976-7337-1 C0098

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)